

# 自治研究 かながわ

1987  
**12**

No.12(通算76) 3知事テレビ会議、国際シンポジウム



法人 神奈川県地方自治研究センター

# 自治研究 かながわ 1987 12

No.12(通算76) 3知事テレビ会議、国際シンポジウム



神奈川県地方自治研究センター

## もくじ \* \* \* CONTENTS

### 三知事テレビ会議

「地域に根ざし、地球へ発信」

北海道知事 横路 孝弘

福岡県知事 奥田 八二

神奈川県知事 長洲 一二

司会 評論家 日下部禧代子

1. 地域における自立的な経済のあり方 ..... 2
2. 国際社会における自治体の役割 ..... 11
3. 自治体間の協調とネットワークづくり ..... 17

### 国際シンポジウム

「地球人あつまれ トーク・トーク・暮らしと参加」

司会 渡辺武達教授 ..... 27

医師の車の駐車違反の緩和を

トルコ アルデンバイ氏 ..... 28

職場の親睦旅行は日本特有

オーストラリア ウォーミントン氏 ..... 29

画一的な日本教育に問題あり

西ドイツ 志賀リンデさん ..... 31

同化を求めず、違いを大切にして

中国 オー・ケンエイさん ..... 33

「外人だから分からぬ」と言わないで

アメリカ 中村ペリーさん ..... 36

相互討論 ..... 39

1987年10月14日

## 三知事テレビ会議

# 「地域に根ざし、地球へ発信」

北海道知事 横路 孝弘

福岡県知事 奥田 八二

神奈川県知事 長洲 一二

司会 評論家 日下部 福代子

日下部（評論家） 全国から御参加をくださいました皆様方、こんにちは。ただいまから「地域に根ざし地球へ発言」と題しまして、北海道、福岡、神奈川の3知事によるテレビ会議を始めさせていただきます。

私、司会を担当させていただきます日下部でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）

ことしは日本国憲法、地方自治法が施行されてから40年でございます。また、自治労による地方自治研究活動がスタートしてから30年という歴史的な節目の年に当たります。

それから1978年「地方の時代」がアピールされてからちょうど10年目ということになるわけでございます。このような記念すべき年に北は北海道、南は九州の福岡、そして地元の神奈川

もそれぞれユニークに意欲的な自治体づくりに取り組んでおられ、今後の日本の方向に対して非常に重要なかぎを握っていらっしゃる3人の知事をお迎えして、グローバルな視点

から地域の現状と未来について語り合っていたいということはまさに意義の深いことだと思います。

ところで、北海道の横路知事は、ちょうど今、道議会の最中でして、あらかじめ収録しておりますビデオで御参加いただくということでございます。また、御都合によっては生のお声をちょうだいすることができるかもわかりません。

さて、あらかじめ討論のテーマを3つほど立てさせていただいております。

まず最初に「地域における自立的な経済のあり方」、2つ目に「国際社会における自治体の役割」、3番目に「自治体間の協調とネットワークづくり」、そして「自治体職員」についてという、この3つのテーマをあらかじめ立てさせていただいておりますが、フリーにお話をいただけたらと思います。

いま日本の産業構造、雇用構造、貿易構造というのは今大きな変換期を迎えております。鉄鋼、造船、石炭など、いわゆる重厚長大型から軽薄短小のハイテク産業へと世代交代の時期を迎えております。

また、新東京時代とも言われる東京首都圏への一極集中が進行中でございます。高度成長期



に一たん縮小したかに見えた地域間の格差が再び拡大しているような傾向さえ見え始めております。地域経済の転換、地域経済の創造、地域計画の活性化ということは、まことに重要な今日的課題であるかと思います。

こうした状況において、脱工業化時代における地域経済のあり方について、まずお3方のお話を承りたいと思います。

まず最初に、横路知事、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 1. 地域における自立的な経済のあり方

風土にあった  
新しい産業の育成を  
横路 北海道知事

横路 北海道知事 皆さん、こんにちは。  
北海道知事の横路です。

本当は集会へ出席して直接お話ができるといいんですけども、ちょうど私ども第3回定例道議会を開催中でございますので、このビデオを通じてお話を申し上げたいと思います。

会場にお集まりの皆さん、こんなにたくさんの方々が集まって自治研集会を開かれる（笑）声）ということは大変すばらしいことだと思います。地方の自治体の存在というのも、もちろん大きく見ますと国の基本的な枠組みの中にあるわけでありますから、地方財政対策一つをとってみましても、もっと国の基本的な政策のところで変わっていかなければいけないものがあると思います。私ども北海道で言いますと、補助率カットだけの影響で1,000億円近い影響を受けておるわけですね。

しかし同時に、各地域の中でできる努力というものもしていかなければいけない。すべてを制度的な問題に還元してしまうわけにはいかないと思いますね。そんな意味では各自治体、ま

さに競争の時代に入ったと言われています。その内容というもの、それだけ悪戦苦闘の歴史でもあるわけですけれども、我々の仕事というの、結局は地域に住んでいる住民のためにということに尽きようかと思います。

長洲さんが「地方の時代」と言われてから大分たちますけれども、お互いの知恵や経験を交流し合って、そのことをまた自治体の第一線で活躍されておられる皆さん方の手を通して実現され生かしていくというのは大変すばらしいことだと思います。

長洲さんにも奥田さんにもしばらく御無沙汰いたしておりますけれども、ぜひ一度、秋の北海道も大変すばらしいので来ていただきたいと思います。

北海道は日本の面積の22%、人口は4.7%ということですから、大変広大な土地です。アイヌ民族の人たちの長い歴史、これは日本書紀とか古事記にも記載がございますが、そういう先住民族の歴史を受けて本格的に開拓が進められたのは明治以来ということですから、大体120年ぐらいの歴史がございます。もちろん、松前藩を中心とした道南の開発は700年、800年という歴史を持っておるわけですし、その当時、既に中国や当時のロシアともいろんな交流があつたんです。

松前藩のある家臣で、絵をかく鰐崎波齋という人がいましたが、その人が17世紀にかいた絵が最近フランスで見つかりました。アイヌの酋長の人をかいた絵なんすけれども、この人が羽織っておる羽織は、当時の中国でできた山旦織という織物ですし、その羽織の上に羽織っておるマントはロシア風のマントでロシアの木の靴をはいている、そんな酋長の姿が絵に描かれております。

当時の北海道は、既にアイヌの人々が各地で生活をし、松前藩もそこで生活をして、しかもかなり北を通じて中国や当時のロシアとの交流もあったということを示しているわけです。

しかし、本格的な歴史は明治以来ということです。明治以来の北海道を今日まで支えてきた産業ということになりますと、石炭を中心とした鉱山とか、農林水産業、同時に造船、鉄鋼、アルミなどの産業が北海道を明治以来支えてきたわけで、ある意味で言いますと、木を切って住宅の資材を提供し、石炭を掘って日本の明治以来の発展のエネルギー源を提供し食糧を供給してきたのが北海道だということがいえようかと思います。

#### 魅力を活かして構造転換を

その北海道が今、これらの産業がいずれも厳しいわけですね。これは自然現象ではもちろんなくて政府の政策の展開によるわけでございまして、何といっても背景には急激な円高がありますし、石炭のように第8次石炭政策によって今までの2,000万トン体制から1,000万トン体制に縮小されることになった、こういうことの影響を受けてのことでもあるわけですね。

産炭地域などは石炭が主要産業ですから、石炭がなくなりますと地域そのものが崩壊すると

いうところに直面しているわけで、今これらの課題に対応しながら、同時に新しい産業、新しい企業をどうつくっていくのかということが一番問われているわけです。



北海道の人は非常に定住志向が強くて、全国で1番ですね。北海道は212の市町村がございますけれども、今住んでいる町や村に将来とも住み続けたいと考えている人が全道平均で80%を超えておりまして、1番ですね。ところがなかなかこういう経済環境で働く場所がない。毎年春になりますと7,000人ぐらい新卒の人たちが本州の方に、東京とか神奈川の方に行ってしまうわけですね。何とか地域の中に雇用の場をつくっていかなければいけない、これが今私どもに課せられた大きな課題になっております。

それには、今まである産業を大事にしながら、さらにそれを発展させていこうということです。1次産業である農林水産業、それから工業生産の4割を占めている食品産業、最近、観光産業も大変順調に伸びてきています。ことから観光客の入り込みは10%以上とどんどんふえてきており、北海道の大型のリゾート基地開発も進められてきております。

全国のいろんな調査をしますと、行ってみたい観光地はどこか、1番が札幌市ですね。そしてベストテンの中に北海道は4カ所入っております。函館とか、オホーツク・知床とか洞爺・支笏湖ですね。しかも、一度来た方がまた行きたいという方が大変多いので、これは北海道にとって大変うれしいことです。

北海道の物産展を全国でやりますと、神奈川でやっても福岡でやってもどこでやりましても

大変な人気があります。北海道の農産物、海産物と言えば本当においしいということで皆さん方に御評価いただいて大変ありがたことだと思いますが、こういうような産業というものを、さらに私どもはしっかり発展させていきたいというように思っております。

また、新しい産業、例えば情報関連の産業なども、今は事業所数からいいますと、東京、大阪、愛知に次いで全国で4番目です。売上げは神奈川がその間にありますので北海道は5番目です。これなどは東京から仕事を持ってきて北海道で付加価値を高めて、また東京に戻していくというようなことになっておりまして、北海道のような四季の識別がはっきりしたすばらしい自然環境の中でこそふさわしいような産業ではないかと思っております。

### 15の戦略プロジェクトの実現を

将来の産業としてはバイオテクノロジー、北海道の1次産業に関連をさせながらバイオテクノロジーなども優秀な人材がそろっておりますので、これから北海道を担う大事な産業ではないかというように考えております。

いわば既存の産業、新しい産業を育てながら北海道の風土に合った、あるいは北海道の今までの蓄積を生かした産業を育てていこう。そのためには企業誘致も進めながら、同時に地域の中の自発的な、内発的なエネルギーを大事にしていこうとに考えております。地域からの自発的、内発的なエネルギーを大事にしながら、同時に大きなプロジェクトも進めていこうということで、今私どもは15の戦略プロジェクトというものを用意しております。

その1つは、例えば来年の7月に千歳空港の新しい滑走路ができるんですけども、これを



使って国際的なエア・カーゴの基地にしようという構想です。北海道は国民の目から見ると北の端、だから非常に北極に近いところのように勘違いしている人がたくさんいるんですけれども、地球儀の上で見ますと、そうではなくて北半球のちょうど真ん中なんですよ。東京とか神奈川というのは、もうナイジェリアかアルジェリアぐらいの緯度でございまして（笑声）、北海道はパリよりちょっと南ぐらいで、ニューヨーク、ワシントンぐらいの緯度にあるわけでございまして、世界の主要文化、工業都市というのは北緯40度から45度に集中しているんですね。

そこでエアカーゴの基地としてのねらいというのは、アジアの玄関口としての機能を果たしていくこう、貨物ばかりではなくて旅客の流れも変えていくこう、これによって国民の皆さんの北海道を見る目も変わってくるのではないかと、こんなことも期待してこの計画を進めています。

既に、私もアメリカに参りましたが、エミリーとかフライングタイガーというアメリカの航空会社が千歳空港をぜひ使いたいという希望が出てきています。千歳は全国21の都市と航空路線でつながっていますね。いま北陸や東北の人たちが外国に行くのに飛行機で羽田に行って重い荷物を持って成田まで行くか、汽車を利用するかして、いずれにせよ上野へ、そして成田へと大変な思いをしているわけですね。千歳から出ることになりますと、千歳に飛行機で来てその

まま外国へ行けるということになるわけで、貨物、旅客、両方の面をとってみても千歳空港の役割というのは非常に大きなものがあるのではないかだろうか。

もうひとつは航空宇宙産業基地構想ですね。これからスペースシャトルの時代に日本も入るということになりますと、鹿児島ではもう狭いということもありまして、北海道の広大な土地を利用して航空宇宙産業基地にしていくというものです。その他に大型のリゾート基地開発構想とか、もっと雪を利用して雪に親しんでいくこと、いろんなプロジェクトを用意しております。これも私ども行政と民間、地域の皆さんと一緒に進めていくと考えております。

したがって、21世紀は本当に北海道の時代になるんじゃないかな、大いにみんなで頑張っているところであります。

日下部 どうもありがとうございました。  
それでは、次に奥田知事にお願いいたします。今横路知事のお話を伺っておりますと、大変に北海道のピーアールをおやりになっていらっしゃいましたので、ぜひお2方ともピーアールを御遠慮なくなさっていただきたいと思います。

奥田知事、どうぞ。

#### 県民との対話から

#### 技術と国際化の県政へ

奥田 福岡県知事

奥田 福岡県知事 皆さん、こんにちは。自治研集会にこうしてお招きいただきまして、パネルディスカッションに出席しておることを大変光栄に存じておるところでございます。

今、横路北海道知事のお話を聞いておりまして、それぞれごもっともなことだなあという感じを改めてしまふところであります。私の感

じとしては、横路さんの今の話を聞いておりますと、福岡県の位置づけは北海道と神奈川のちょうど真ん中じゃないかなという気がするわけです。位置として一番西南の方にある

んですけども、状況というのは真ん中のような感じがいたします。北海道ほどではないし神奈川ほどでもないということだと思います。(笑声)

だから、私のお話ししたいことは、神奈川と北海道の真ん中ぐらいということをまずは確認しながら福岡県としては一体どういけばいいのかという自覚のほどを申し上げたいと思います。

ただいま横路知事の発言がありましたように、地方は地方なりの自主性を大いに發揮していかなければならぬと思います。その中から競争というのも出てくるだろう。これは全く賛成であります。長洲知事が「地方の時代」と言われたその中身の重要な部分がこういう言葉で説明できると思うんですが、私はこれに加えまして連合・共生ということも言わなければならぬ。共生というのはともに生きるということです。ですから、地方の時代というのは自主性がはっきりして、それから競争、これは結構です。同時に、私は連合、そしてともに生きる共生という要素もここで強調させていただきたいのです。

九州というのは1つの島でございまして、日本の西南の端にあるわけでございます。今、九州知事サミットというのもありますし、今後、帰りますとすぐ九州北部の3県知事サミットというのがあるわけです。既に福岡県と大分県の間には漁業関係の、いわゆる栽培漁業を一緒にやっていくという話です。いま、サザエやア



ワビ、ガザミとか海老などを一緒に研究し、放流も共同事業でやろうかというはなしです。

それから九州青年の船というのを毎年出しています。各県から30名から50名とだしまして、社会学習の仕事を一緒にする、あるいは道路の問題、観光の問題など一緒にやった方がいいということを、もう少し強調した方がいいんじゃないかなと思うか。

私たちは、行政をうまくやっていくために東京の中央政府に陳情することは当然やっていますし、熱をいれていますけれども、それだけに頼って、それだけでうまくいくと思ったら間違いではないか。お互いに競争もせにゃならん、自主性も強調せにゃならんけれども、手を取り合ってやっていくということが大切ではないか。縦系列あるいは横ではじき合をするということではなくて、どこかで手を結ぶことが必要です。今回のこのパネルディスカッションもある意味ではそうした問題を持っておる県同士の連携ということ、その面も地方の時代という言葉の中には重要なファクターとして入れたいなというのが私の気持ちでございます。このパネルディスカッションに出られたということは、大変私はいいことだったかと思うわけです。

#### 県民参加型県政の推進

それからもう一点ですけれども、私の基本姿勢としては、開かれた県政、あるいは県民参加型の県政、県民本位の県政というような、この地方自治研究集会の「地方自治を住民の手に」というスローガンがございますように、できるだけ住民を主体とした物の考え方、行政の方を私は何よりも大事にしていきたいと思うのです。

1、2紹介させていただきますと、一期目か



らやってきましたのが対話集会でございまして、福岡県は470万余りの県民でありますけれども、地域にどんどん行きました。この4年間で対話集会、対話事業を約80回、だから年間20回、月に直しますと大体一ヶ月に1回半ぐらい地域に行って住民との対話を持ってきておるわけです。

そうした中から、住民の声を十分聞いて自分の目とし耳とするという姿勢を崩さないということです。つまり常に苦楽は住民と共にあり、住民の苦楽を基本として行政をやって行く。そういうことで、私はこれをやり抜いて行きたいと思うのです。

私が知事になってすぐ神奈川県に参りました、長洲知事に先輩格として情報公開を学びました。県民の税金で賄われた汗とあぶらの結晶である行政、それを県民が自分のものとしていく、その一つの手段として情報公開というのは大事だと考えました。神奈川県に大いに学んだ成果がありまして、昨年の9月に情報公開が制度として発足するまでにこぎつけることができました。

情報公開の先進県が6県ありましたが、6県に比べてみると自慢のように聞こえるかも知れませんが、利用率が一番高いと数字に出ているといわれます。やはり県民が行政を自分のものにするという視点を常に貫いていくべきであるということです。

それから対話行政との関係で職員の活性化が

大切ですね。職員にやる気を起こさせる、職員が本当に仕事を通じて汗やあぶらを流しながら住民の生活に溶け込んで住民の苦楽とともにしつゝ、県政の発展に努力するというような職員の生きざまとを、私は大いに奨励していくことによって地域の活性化に、本当の地方の時代になるのではないかという点を強調したいわけでございまして、その点に努力しております。

### 歴史と地理的条件を活かした産業を

もう一つは福岡県は北海道でもなければ神奈川県でもありませんので、福岡県なりの特徴を理解しなければならないと思います。その特徴として歴史的にみると、遣唐使、遣隋使等々中国との交流、日本の古代のことを考えてみても中国や朝鮮との交流なしにはなかったと思うが、ほとんど圧倒的に福岡、あるいは博多がその交流の拠点になったという長い歴史があります。金印が発見された。これは2,000年前のことですけれども、この後1,000年たっても変わらないと思います。

そういう意味で福岡に置かれています地理的な条件は、今、横道知事は北緯40度、50度ぐらいが中心だといわれましたが、そういう主張も一応認めた上で（笑声）、やっぱり一番近い朝鮮半島、あるいは中国大陸、その2,000年の歴史というものの重み、私どもの先輩がやってきたそれを感じ取らなければいけない。将来の県政の進め方もそこのところ着目をしなければいけないと考えています。

もう一つは現実の問題ですけれども、日本の4大工業地帯とかいう言葉がありますように、4人目の兄弟分としてはちょっと小さい過ぎますが、福岡は人口から文化から技術などの集積の度合いは4番目でございます。したがって、

4番目の弟分としてそれだけのプライドを持って県政を進めていかなければいけないと思います。

残念ながらもう一つの自覚は、横路知事の発言の中にありました石炭と鉄です。何といっても福岡県から産出された石炭は、最高時点では全国の4割を占めていたんです。これで日本は産業革命が遂行され近代化されていった。そのような歴史を近代の歴史として持っているわけですが、今日は石炭も鉄も重厚長大ということで非常に停滞、沈下し、筑豊から石炭がなくなつて既に20年になります。

そういうことにこだわらないといいますか、全くそれから違った方向に県政、それから経済方向をリードしていかなければならぬという大きな課題があるわけで、この課題に向かってこれから真剣に取り組んでいこうと思っております。

のために、技術、それから国際化の2つに重点を置いて、県民の自主的な努力、他県との交流、あるいは連携によって福岡県の経済、社会、行政の発展を図っていきたいと思います。

（拍手）

日下部 どうもありがとうございました。  
それでは、次に長洲知事、どうぞ。

産業構造の転換を乗り越え  
科学技術のメッシュ力に  
長洲 神奈川県知事

長洲 神奈川県知事 神奈川の長洲でございます。

まず、全国から皆さんようこそ神奈川へお越しくださいました。770万の県民を代表しまして、心から歓迎いたします。こういう機会をおつくりくださった自治研の皆さん、本当にあり

がとうございます。皆さんの活動が、私どもの自治体行政、地方自治にしっかりと根づいていることを私どもよく認識いたしております。

また、北海道の横路知事、福岡の奥田知事お2人とも、私、古くからの友人でございます。同時に知事としても心から尊敬している方々であります。この3人でこういうシンポジウムが開かれますことについても厚くお礼を申し上げます。

お2人のお話の中身を聞いていて私も大変深い感銘を受けました。横路さんは北海道が世界の中心、奥田さんも福岡が日本の中心、神奈川も実はそう思っておりまして（笑声）。「日本列島をごらんなさい。ずっと北海道から南へ下がってくる日本列島の線。それから九州から東へやってくる東西の線。そのちょうど扇のかなめのところにあるのが神奈川です」と、言っております。

私は、知事というのはそれぞれの県、あるいは道に誇りと責任を持っている。しかも横路さんも奥田さんもお話のように夢を語っておられ、希望を語っておられます。私はこのことはとても大事なことだと自分でも考えております。

今の政治は難しいことだらけです。行政も難問だらけですけれども、しかしながら、政治家というのは、やはり希望と夢を語らなければいけないと思います。いろいろ苦労はあるけれども、こういう方向に皆さんと一緒に行きませんか。



か、こういう呼び掛けをするのが政治家の仕事でございます。それなら一緒に歩いてみようか。当面苦労はあっても、子供たち孫たちのためにその方向に北海道は行こうか、福岡

は行こうか、神奈川は歩いてみよう。こうして日本全体に初めてダイナミックな動きが生まれるんだろうと存じます。そういう意味でも、大変感銘深くお2人のお話を伺いました。

同時に、お2人ともいろんな知恵を出されております。それぞれの北海道の条件、福岡の条件、歴史に応じて知恵を出し、そして奥田知事がおっしゃったように、それぞれ競争していく。そして同時に連合し共生していく。私はこれがこれから的地方自治の基本的な哲学でなければならないと思います。

神奈川も大変歴史が古うございます。鎌倉もあります。また、近代スタートした横浜の文明開化もあります。そしてまた京浜工業地帯、現在はハイテクの世界的センターになっております。一方、美しい自然があります。湘南のなぎさあり、箱根、丹沢のやまなみがあり、大変私どもはこの自然と歴史に誇りを持っております。これに基づいてあすの神奈川をもっと活力ある、もっと魅力あるものにしていこう。「かながわくにづくり」と私はあえて全部平仮名を使っておりますけれども、「活力と魅力あふれるかながわくにづくり」ということで県民の皆さんと一緒に夢を語り、そのための苦労をともにしていこうということでやっておりますし、県下37の市町村とも、そういう形で連合と共生の道を歩きたいと思っております。

#### 画一と集権から、多様と分権へ

私が知事に就任しましたときに、県は市町村連合の事務局だという位置づけをして、その後、市町村の皆さんとも協力しております。さらに先ほどの奥田さんのお話のように、市町村は県を超えていま全国的に交流しております。また、県同士の交流も都道府県の間でぜひ深めた

いと改めて感じた次第です。

私は昭和50年に知事になりました。そのころから私なりに考えておりましたことは、これまでの日本は「画一と集権」でやってきた。しかしこれからの課題は「多様と分権」の日本をつくることにある。そうしたところから「地方の時代」という提唱をさせていただいたわけでございます。

自治研の皆さんには、そうした方向で多年御努力をなさっていると思います。皆さん、「地方の時代」は一見とんざしているように見えます。しかし流れそのものは変わらないと思います。またそちらの流れを強めなければ日本の21世紀は暗いものになると私は固く信じております。知事をやっているからそういうことを言っているんじゃございません。そういう考え方で知事に立候補したのです。

私は皆さんとともに改めて、「画一と集権」ではない、「多様と分権」の生き生きとした日本列島づくりを行っていきたい。その「地方の時代」の自治体に働くことの誇りを皆さんと御一緒に、この場でかみしめたい、再認識したいと存じております。

皆さん誇りを持ってやりましょう。自信を持って。私どもはそれが日本の歴史的課題だと思います。そうでない限り暗い時代になってしまふと思います。私どもはそういう大きな日本全体の運命をそれぞれの地域で、それぞれの場所で実現していく。担っていく。そういう気迫と誇りで私も仕事をいたしたいと思います。どうぞ皆さん御鞭撻ください。（拍手）

きょうの最初のテーマは、「地域経済」でございますが、奥田先生も私も経済学者上がりです。経済というのは、イギリスのある学者が「憂うつな科学」と名づけたことがあります。経済というのは確かに憂うつな面があります。しか



し、やはり経済にしっかりとした視点を据えて経済に強くないと、本当の行政、本当の政治はできません。

今日、日本の経済といつても、実は世界の経済全体の中で決まっています。また、個々の自治体が道路を1つつくる、何をやるにしても経済の問題が深くかかわっております。そういう意味で、私どもはたとえ憂うつな科学であろうと経済の目をしっかりと持ちたい。

そして、今まで経済と言えば大筋は国が決める。そして県の商工行政は、その下請で法律に従って補助金を出したり金融をやったりする。そういうことになっておりましたが、この10年余りの全国の動向を見ますと、それがさま変わりしてきたと思います。先ほどの横路知事も、千歳のインターナショナル・エア・カーゴの基地をつくる。世界経済の交流拠点をつくるともおっしゃっておりました。奥田知事のお話の中にもございます。

私は、自治体、市町村はもとよりですが、特に広域自治体である都道府県は経済政策をしっかり持たなければならないと思います。

#### 頭脳集約型の産業構造への転換を

神奈川でも、県民の福祉の基本は雇用です。雇用を守るのはどうするか。基本的には産業の発展です。その産業の発展を促していくのは何



か、やはり大きな技術の進歩だと思います。そういうところから、実は私は10年前に「地方の時代」を全国に提唱させていただいたときに、同時に「地方の時代といっても、ただ言葉だけだと空念仏になる。地方の時代を支えるボディー、肉体、これは地域経済である。地域経済についても私どもはしっかりととした視点で勉強していくこう」とこういうことを提起させていただきました。全国の都道府県、それぞれそれなりに地域政策、地域経済政策の主体になりつつある。これは明治以来かつてなかったことだと私は考えております。

そうした中で、神奈川は東京の隣にございまして、京浜工業地帯というものを歴史的に持ってきております。そうした条件を生かして、私は神奈川を技術立県、科学技術の世界のメッカにしようという戦略をたてております。それを「頭脳センター構想」と呼んでおります。事実、神奈川は研究所の数とか従業員当たりの科学者の数、技術者の数はダントツで全国1でございますし、そういう頭脳の集積があります。

また、産業構造全体が重厚長大の部分もそうですけれども、軽薄短小と言われる最近のハイテクの集積は神奈川がおそらく東京と並んで全国トップだと思います。お国自慢と聞こえたらお許し願いたいと思いますが、川崎にテクノビアがございまが、ハイテクのセンターがこういう形でぞくぞくできており、南北にわたって川

崎が実にダイナミックに変わってきております。私はおそらく世界最大のハイテクの集積地は川崎だろうと思います。この動きは横浜にも、当然県の中央、さらに西の方まで、現在、東名高速沿い、あるいは国道246号線沿い等にどんどん広がっているわけでございます。

私はかねてから、これからは先進国との競争もある、発展途上国の追い上げもある、そういう中で日本の産業構造は多かれ少なかれ高付加価値型の、頭脳集約型の産業構造に転換しなければならない。全体がそうなるとしたら、その一つのセンター、モデルは神奈川だろうと認識しておりました。したがって、そのつもりで頭脳型の産業、研究所などを神奈川に集積する、これが「頭脳センター構想」でございまして、それに応じて土地利用その他さまざまな面をすすめてまいりました。私が知事になりましたころから考えますと、おそらく商工行政などの身は全く変わってきたと思っております。

これは農業等もそうでございます。神奈川の農業は、面積は小さいのですが、単位面積当たりの資本投下額、付加価値額は恐らく全国最高だろうと思います。頭脳型の産業でございます。

最近では、神奈川の海についても、漁業からマリンスポーツまで含めた広い意味で「海業」と考えよう、山の資源は「山業」という視点を取り入れようと、文化産業やらリゾート問題やらも取り入れているわけでございます。

ちょうど今、日本全体が歴史的な産業構造の転換期に入ってきております。それに新しい技術革新がつながって産業構造はさまわりに変わっております。個々の企業もリストラチャーリングに取り組んでおります。

神奈川には大鉄鋼会社もありますけれども、大鉄鋼会社が数年後には鉄の売上げを総売上げの半分にするという大体質改善をやっている

最中です。産業がさま変わりに変わっております。私は恐らく5年後、日本の産業はがらりと姿を変えているだろうと思います。その中にはニュービジネスもたくさん含まれると思います。

私は神奈川の県民の皆さんには、そうした新しい21世紀型の日本の産業構造のモデルを神奈川の地で示してみましょうということで、経済界はもとより労働界、さまざまな分野の方に呼びかけているところでございます。私は神奈川にはそのポテンシャルティーがあると考えております。この可能性を存分に花開かせる。そのため県行政、市町村と連携をしましてあらゆる面で町づくりをそういう方向で進めていく。

支援していく。これが県の仕事だと考えております。北海道の経験、福岡の経験等からも私はぜひ学びたいと思います。

私が知事になりましたから、全国主な県に内地留学という名前で参上いたしました。東京へ通うのもいいんですけども、それよりもすばらしい手腕をお持ちの、哲学をお持ちの知事の県に伺って、お話を伺い、目で見てくる。こういう知恵の学び合いの中で、神奈川は神奈川らしくその知恵を生かさせていただく。こういうつもりで今後ともやっていきたいと考えております。（拍手）

## 2.国際社会における自治体の役割

日下部 どうもありがとうございました。

北海道、福岡、そして神奈川、それぞれの歴史といろいろな状況に応じた形で21世紀に向かって羽ばたこうとする大変力強いお言葉をいただきたように思います。お3方のお言葉の中に共通しておりましたことは、今は地域経済、あるいは国内の経済それだけではなくて、やはりインターナショナルな国際化ということと切り離しては考えられない。特に地域経済も、いまや円高、貿易摩擦などによりまして国際変動が地域を直撃しているような状況でございます。

いまや地域経済というのは、国際経済の重要な一部を構成していると言ってもいいんじゃないかなと思います。そういう地域経済と国際的なかかわりということが1つ重要なことだと思いますし。また、国際化ということを考えますと、どうも日本は国際的に有名なのは経済だけ

が突出しているような気がいたします。

私ごとで申しわけございませんが、外国に大分おりまして、新聞を朝開きますと新聞の1面、あるいは2面に日本のことは出ております。しかし経済のことしか出ておりません。経済のことは毎日のように出るわけでございますが、そのほかのことに関しては日本のことほど新間に出ていない。とっても寂しい思いをずっとしてまいりました。経済の国際化と同時にやはり人と文化の国際化ということも非常に重要なのではないかと私は思います。

国際化の問題、自治体と国際化、あるいは国際社会における自治体のあり方ということも踏まえてお話をいただければと思います。

それでは、長洲知事からお始めいただけますでしょうか。

地域に根ざし、世界に開く  
民際外交の展開を  
長洲知事

長洲 私は「地方の時代」ということを提唱させていただきましたが、そのとき同時に申しましたのは、「世界の時代」になってきたということです。日本人はとかく国家、国家、国家でずっと明治以来ものを考え過ぎている。しかし、日本民族の大きな運命は国家が決めるわけではない。世界の中で決ってくる。また、日本民族の具体的な暮らしの問題は国家が決めているのではない。それぞれの地域、地方が担っている。当面、もちろん国家という枠はなくなりません。しかし、国家というのはほんの二、三百年の人類史の中で出てきたものでございまして、時代が動いております。当面私は「世界・国家・地方・人類・国民・市民」この3つの物差しを十分使いこなすかどうかが、日本民族が21世紀まで明るく暮らしていくかどうかの境目になると考えております。その中の「地方」という点に力点を置いたのが「地方の時代」でございます。

同時に、我々は「世界」を開かれなければなりません。そして、「地方」の場からむしろ「世界」につながっていく。これが大事ではなかろうか。これが私が知事になりましたから神奈川で提唱しております「民際外交」でございます。「民際」という言葉ですが、日本では「国際」と申します。英語で国際はインターナショナルですから国民同士という感じがあるかもしれません、日本語で国際というと国と国としか感じません。しかしながら、私どもはこれからは民衆対民衆、ピープル・ツー・ピープルの交流と外交を真剣に考えなければならぬ。

い。これが私の「民際外交」でございます。

実はこの10数年、全国の自治体の国際交流はものすごく広がりました。大変数がふえました。姉妹州とか姉妹市とかいう関係もふえましたし、中身もどんどん広がっていると思います。私は外交とか国際交流というのは、何か日の丸をしょわなければならない、そういうことだけではないと思います。中央政府対中央政府、私はガバメント・ツー・ガバメント、G to Gと、こう申しますがそれだけが外交ではない。

また、今、日下部さんのお話しのように、どうも日本は経済だけでビジネス・ツー・ビジネス、B to B。これだけでもない。もっとローカル・ツー・ローカル、L to L、それからピープル・ツー・ピープル、P to Pですね。こういう重層的な交流があって初めて国際関係も安定してくる。私はそう思います。

そういう観点から、どこの県でもかなり国際交流、神奈川県で言う「民際外交」には力を入れております。神奈川の場合はビジネス・ツー・ビジネスのための県内版の組織もつくってございますし、ピープル・ツー・ピープル、市民同士の交流、文化関係、スポーツ関係など、たくさんございます。また、L to L、ローカル・ツー・ローカル、自治体同士のいろんなつながりも、県内の市町村を含めてたくさんいたしております。

まだまだ不十分ですけれども、それぞれの地



域が世界の地域とつながっている。「世界・国家・地方」「人類・国民・市民」という中の、市民として世界につながっていく。これが国としてのつながりをも補強していくその土台になる。そういう意味で私は1県1市町村でやる国際交流は小さいけれども、全国のそれが積み上がるならば、それは私どもの大きな力になると思います。

### 市民レベルの友好関係を

今、例えばソ連とか北朝鮮とか、日本はせっかくの隣国と仲が悪いのです。このままでいいはずはないのです。それならば、地方自治体がせめて人ととの人間的な交流はやっておきたいと思います。また、中国ともアメリカともぎすぎすしております。こういうときに市民レベルの友好関係がしっかり築かれていかなければならぬと思っております。それは自治体がかなりイニシアチブをとってやるべき仕事だと信じております。

もう一言つけ加えさせていただきます。

それは、日本がこれだけ世界一の金持ち国と言われるようになって、これから日本の仕事は何か、この豊かさを何に使うかということです。1つは世界の平和と発展への貢献だと思います。稼いでいるばかりで、物を売って貿易黒字が出て、その金でまた金貸しをやっていきます。こういうのが尊敬されるはずはない。必ず仲間はずれになります。そういう兆候は世界じゅうに満ち満ちているんです。

平和と途上国その他の発展にこの豊かさをどう使うか、日本人はテレビと車のセールスマントだけではないということをもっと世界に事実をもって示していく必要がある。それが、私どもの責任でもあろうかと思います。

もう一つは、国際国家、国際的な大国になつたなどと余り肩ひじ張らない方がいいと思います。それよりも世界への貢献と並んで、我が身の回りのところで国際社会に通用するような都市の質とライフスタイルをつくり上げていく。国際社会を日本の中につくっていく。外国人が見ても、「あ、なかなか日本人は文化にもセンスがある。外国人にも親切だ。開かれているな」という国際社会を日本の中につくっていく。そのためにやることはたくさんあります。

こんなに長い時間働いている先進国は世界中どこにもありません。こんなに下水道が貧弱な国もありません。こんなに道路が貧弱なところもありません。福祉の面は努力しておりますがまだまだ遅れています。いろんな面で国際先進社会並みのものを我々の身の回りにつくっていく。国際国家ではなくて、そうした国際社会をつくっていく。そして外国から来た人も、また神奈川県内には大勢外国人が住んでおりますが、そういう方々も、「あ、日本は開かれたいい国だな。独特の文化もあるけれども、人を差別しない、いい国だな。いい土地だな」と、こう思われるような政策をぜひ私は自治体を中心になって努力してまいりたいと思っております。

以上です。（拍手）

日下部 どうもありがとうございます。

それでは、次に奥田知事、いかがでございますか。

### 支店経済からの脱却

### アジアに開く国際交流

奥田 知事

奥田 少し意見を述べてみたいのですが、今長洲知事のおっしゃった民際という観点を取り上げられた点、全く賛成なんですが、福岡か

らそれを考えてみると、外国と交際するには魅力があるところでなければならない。先ほど触れましたように、筑豊から石炭がなくなつて20年です。そしていまや鉄も、もう50%というような段階にきているわけですね。

私ども県政をあずかっておりますと、石炭の後遺症、鉄、あるいは重化学、八幡と大牟田を代表して皆さん考えていただければわかると思いますけれども、こういう後遺症に悩まされ失業とかいろんな問題に苦慮している状況、これでは外国とつき合っていったってちょっと面映ゆいんですね。

したがいまして、民際というか自治体と自治体の交流のためには、どうしても個々の県が魅力のある県でなければならない、魅力のある地域でなければならないと私は思うのです。

そういう意味では、県経済、地域経済の自立と発展を基礎に置いて、そして国際化という方向を目指さなければならないということから、私は2つ提言しているわけです。

1つは、技術立県です。20年前から石炭がなくなつてしまつたんですが、一昨年、新日鉄の全国の頭脳集団というのは八幡にあったんです。これをすべて君津に引き揚げてしまう、いうなら千葉、東京圏に持っていくというので、私は極めてショッキングな受け取り方をいたしました。大牟田の問題もそうですけれども、中央大資本に支配された福岡県経済、これではなすがまま、なさぬがままにしかないということをつくづく感じました。

昔から、支店経済と言われ、支店経済の典型的なのが福岡でございます。我々は支店経済は支店経済、これは結構なんだけれども、支店経済のはかに、親企業がどうなさろうが倒れようが弱まろうが地場の力をつけなければいけない、地場産業の力をつけていかなければならぬ。

私は魅力のある地域経済であれば企業はよそに行かないと思うんですね。したがいまして、魅力のある地域経済の形成のために、技術立県を私は一昨年から言い始めて、政策の重点に置いております。石炭、鉄のなき後福岡県に何が残ったのか。ふるさとあり山あり川ありますけれども、残ったのはそういう支店の後遺症です。それからもう一つは、人材であり技術であり地理的条件ですね。これを生かさなければならぬ。幸い重厚長大でなくて小さな資本でも十分利用できるのが今日の先端技術であります。

長洲知事も触れられましたけれども、先端技術の面で福岡県は決して人後に陥ってはならないのであります。巨大な資本が要るわけではない。それでは1農家にも先端技術が利用できるような、1漁業の方にも利用できるような、もちろん商業、通信、交通、そして地場産業というものが先端技術が利用できるように、そして他の地域に負けないだけの競争力を持つ、そして山あり川あり福岡はいいところだと、こういう条件をつけて、そして国際化ということが必要だ、というのが私の論理構成、私の理屈の組み立て方であります。

---

### アジアの中心、福岡を生かす

---

そうした上で第2点目に私が強調したいのは、国際化の問題であります。国際化と申しますと、先ほど来触れておりますように、日本列島を北からこう、あるいは西からこうくると神奈川県でぶっかかるわけです。結構です、私はそれは十分認めたいと思いますけれども、日本列島だけを見ないでアジア全体の地図を見ていただと（笑声）、やっぱり九州がど真ん中になるわけです。

それで、私はアジア全体を見る。上海まで870キロ、東京までが1,100キロ。大体東京に行くより上海に行く方が近いんです。したがってソウルに行く方がもっと近いんです。釜山などはもう泳いで行けるくらいです（笑声）。

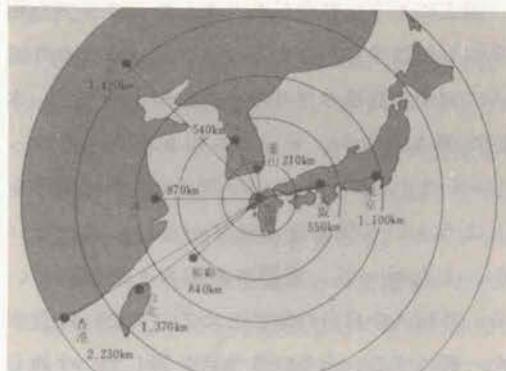
日本は一時不幸な時代がございましたけれども、やはり海洋国であり外国との交流の中で生きてきた国ではないかと思いおります。幸い、今、福岡県の置かれた位置の中で、過去においては太宰府の問題だとか、あるいは遣隋使、遣唐使がそうです。あるいは戦争の場合でも「元寇」、向こうから決して大分に来たんじゃない福岡に元寇は来たわけです。グルッと回って神奈川に来たんでもない、福岡に来たんだと。なぜ福岡に攻めて来たか。

それからまた、豊臣秀吉が向こうに行くときにも福岡あるいは玄界灘から行っておるわけですね。そういう位置というものは、やはり先輩たちも十分利用したであろう、我々もこれを利用しないはずはないと思っているわけです。

それで、私どもはいろんな国際交流のための事業を県としてもすすめてきました。先ほど言った九州青年の船、それから福岡青年の船、それから婦人のつばさ、あるいはラブグリーンと言って、福岡の青年たちがフィリピンに行って木を植えるというような仕事もやっていますし、その他いろいろ数え上げればきりがないんですけれども、そうやっております。

幸い福岡には、領事館が3つあります。アメリカ、中国、そして韓国。それから外国の文化機関がアメリカンセンター、日仏学館、韓国の教育院と外国の文化機関が3つあります。

それから姉妹提携を結んでいる世界各国の都市は15あります。9つの福岡県内の自治体が世界の15の市と自治体交流を姉妹提携をやっていくという現実がございます。こういうものを大



いに活用し、また、こういうことから私は国際交流は今後とも進めていかなければならないと思います。

幸い大学教育機関も福岡県でかなり多く集中しております。特に理工系の大学、学生数というものは全国で3番目じゃないかと思いますが、多くおられます。これまでカイタという北九州国際研修協会がございまして、ここで外国、東南アジア各国の青年研修生の受け入れを北九州の大企業がやってくれておりました。ことしから着工するのが、外務省の関係で国際研修センターというのが北九州にできるんですが、今でも福岡に外国の留学生が560か600人いるんですが、これがもう10数年後には4,000人に膨張してまいります。我々は常に外国人を見るという生活になってくるだろうと思います。

横浜あたりは、それこそ昔から外国人が必ずいる町でございますけれども、福岡もだんだんそれに近寄ってくると思います。私どもは外国人を異様な目で見ない、全く普通の友達として見れるような国際感覚を持ち、そして外国と技術交流をする、人材交流をする、そうした中から本当の国際自治体、国際地域というものが実現すると思うんです。福岡は幸い西日本全体から見ると、1つの大きな拠点であるという自覚を持ってこれをますます進めていきたいと思います。

過去に不幸な戦争がありました。アジアを相手にした戦争もありました。これはやはり外国人に対する認識の足りなさだと思います。本当に個人と個人、ピープル対ピープルとおしゃいましたが、そういう交流もあれば戦争をしようという気になるはずがないのではないか。したがって、実際に外国人と接触している、外国人を自分の家にとめる、あるいは食事を一緒にする、そういう生活を通じて、文通もしているという生活を通じて初めて本当の意味の平和というのが確保されるのではないかと私は思います。

結局、これから外国人のホームステイなどが歓迎できるような、そして福岡の町を外国人が自由に歩けるような、横文字の案内板も要るかもしれませんし、横文字のパンフレットも要るでしょう。そういう点で福岡はまだまだ神奈川よりもおくれております。それで何とかその面で一人前になりたいと。そして、そういう土台の上に国際貿易とか、あるいはもっともっと高度な国際交流とが要るのではないかと考えているところです。

以上でございます。（拍手）

日下部 ありがとうございました。

やはり国際化の問題について横路知事の御発言いただいておりますので、VTRをお願いいたします。

### 生活文化・経済での 北方圏との交流を 横道知事

横路 北海道というのは、よそから来た人を「よそ者」として見る意識というのは47都道府県で一番少ないんですね。それは何かというと、もともと非常に開放的な地域としてつくり

れてきた。特に明治の初めは外国からたくさんの人たちが、1871年に、まずケプロンが北海道の開拓の指導者として来るわけです。ケプロンという人は当時のアメリカの現職の農林水産大臣なんです。この人を、黒田清隆が行きまして年俸1万ドルでスカウトしてくるんです。明治の初めは1ドル1円の交換レートだったんですが、日本の国内で最高の給料取りだったわけです。

大体1871年から10年間ぐらいの間、80人ぐらいの人が外国から来ています。そのうちの半分はアメリカですね。私は明治政府は大したものだと思うのは、北海道の開拓をわざわざアメリカに、ちょうどアメリカの開拓も西海岸に届いたぐらいですけど、ヨーロッパじゃなくてアメリカに学んだということですね。しかもロシアからは、寒地住宅の技術を持っている大工さんとか暖房の技術を持っているような人を呼んだり、石狩川の河口を改修するためにオランダから水利技師の人を呼んでくるとか、世界10数カ国からそれぞれの国を持っている蓄積された一番最高の技術の人を指導者として呼んできているんです。

同時に、それだけではなくて自分たちの中で人材の養成、育成を行った。ですから外国人の人が来て指導に当たったのはわずか10年です。あとはもう日本人がみずから当たっているわけです。つまり、北海道は米国をはじめとする北方型の産業技術や生活文化と深い関わりを持って発展してきたわけです。

### 多様な文化・経済の対応を

北海道はほぼすべての県からいろんな人がやってきて、それぞれの地域の生活を背負って北海道に移り住んできたわけですね。ですから

## 友情は海を渡り国境を越える Crosscultural Friendship Is Getting Stronger

北海道の自治体では、外圏との姉妹提携が盛んでいます。北海道はオーバーランバード州、中部の県と市町村と姉妹提携しています。また遠洋の10ヶ国が、アメリカ、カナダ、オーストラリア、中国などの自治体と姉妹提携をしています。

Sister cities and 17 towns in Hokkaido have sister city relations with local authorities in America, Canada, USSR and China. Hokkaido itself is affiliated with Alberta in Canada and Heilongjiang in China.



一つとりましても、ケブロンが最初に来てびっくりしたのは、まだ木の粗末な家にこたつみたいなものでストーブがないわけですよ。そこで、やはりこれはストーブにしなければいけないということで初めて持ち込まれたというように言われています。いわば南の方の生活様式で生活をしてきたところをまだ背負っておりまして、最近になって本当に北海道らしい文化というのをつくっていこうという方向へみんなの努力が始まってきた、と言えると思います。

私ども特に北方圏、同じ雪国や北国を持つ地域との交流をしようということで、カナダのアルバータ州とか、中国の黒竜江省と姉妹提携を結んでいます。北欧諸国などとの間にも、いわば雪国、北国として持っている生活のスタイルといったようなものを学んでいこうと考えてい

ます。

そういう北方圏交流の、初めは生活や文化を少し私ども先進地に学んでいこうというところからスタートいたしまして、最近、経済交流もやろうというようなことになってきております。

先日も私ソビエトに行きました、サハリン、ハバロフスクなど極東地域との交流を、これから進めていこうという約束をしてきたわけでございます。向こうは、問題は食糧でございまして、北海道にはベレイショとかタマネギとか牛乳が欲しいということです。ただソ連との貿易ということになりますと、バーター貿易ですから、いわば物々交換ですね。こちらの方も何か向こうから買わなくちゃいけない、そうしないと売ることができない。こちら辺のところにいろんな難しさがございますけれども、何とかお互いのプラスになる方向での経済交流というものをこれから追及していきたいと思っております。

いずれにしても、アメリカ、カナダを含めまして中国、ソ連、北欧諸国といったような北方圏地域、北の国々との生活、文化、経済交流へということで私ども努力をスタートさせているといっていいかと思います。

### 3. 自治体間の協調とネットワークづくり

日 下 部 どうもありがとうございました。

それでは、次の第3番目のテーマについてお話をいただきたいのでございますが、今までのお3方のお話にもございましたように、自治体というのはさまざまな問題を抱えているということがよくわかったわけでございます。地方の実力を向上させる、あるいはまた地方に根差し

た政策をつくり出していくためには、さまざまな情報がお互いに必要なんじゃないか、情報交換ということはとっても重要なことじゃないか。

それと同時に、職員の政策立案能力というものを高めるためにも、やはりいろいろな横のつながりが必要なのではないか。自治体間の交流、あるいは職員相互の交流、そういったネットワー

ク、横のつながりをどのようにつくりていったらしいのか、そしてまた自治体の職員のあり方なども含めまして何か御提案などございましたら、ぜひお言葉をいただきたいと思います。

まず最初に、奥田知事からお願ひいたします。

学び合い、競い合う  
連合と共生による連帯を  
奥田知事

奥田 私は、ややもすれば中央に対する陳情で、または地域へと、こういう縦割的な地方自治の進め方というのが本流をなしていたと思います。これからはそれに加えて地域と地域、自治体と自治体の横のつながり、連合と共生と申しましたけれども、つまり他人に学ぶ、お隣に学ぶ、あるいはお隣りとどうつなぐか、そういうことが大事だということを今後とも強調していく必要があろうかと思っております。

「人のふり見て」という言葉がございますように、人の実際を勉強させていただくと大変参考になるんですね。だから、自己発展のために人を見るということが大事だと思うんです。そういう意味で、私ども自身にもチャーミングポイントがありますよということと同時に、お隣さん、あるいは他県にどういうチャーミングポイントがあるのかということを私は注目していかなければいけないと思います。福岡をちょっと申しますと、「7人の知事のすご腕経営」という本が出ておりまして、横路知事も長洲知事もありましたが、奥田知事はないわけあります（笑声）。しかし、どこかチャーミングポイントはあるはずと僕も思っております。

福岡には、筑後に朝倉町というのがありますて、博多方能ネギというのがあるんです。そこでとったネギは、日本航空で空輸されまし

て、そして翌日はもう長洲知事の食卓に乗るようなものです。万能ネギの開拓によってすごく雇用力もふえておりますし、福岡の名前を売り出しておりますし、地域も非常に活性化しております。もう一つは富有柿という柿ですね。その近くにはブドウもあります。そういう物産だけでなく、地域おこしはすなわち人づくりだということで、小石原村という村ですけれども、村をあげて福岡にやってきて、そして村おこしのために努力していることがございます。

それから耳納市といって、筑後川沿いの各町の青年会議所の人たちが中心になって祭というか市を毎年やるんですが、すごく熱氣があるです。今非常に農業が厳しいときですけれども、そういうことをやることによって将来に夢を持ちます。こういうことは私は本当に奨励したいと思っています。

それから柳川といえば、白秋のふるさとでございますけれども、川下りが有名ですね。あれも一つのリゾートといいますか、観光資源としては非常に大事なものであります。こういう物をつくるのにもやっぱりクリークの浄化ということに地道をあげて努力した自治体職員がいるわけです。

それから、音楽で筑豊のダークイメージを変えていこうではないか、と宮田音楽祭というものなどを企画しておりますが、一流の声楽家が



出てきたするんですね。炭坑でいえば、地域の人たちが山祭をしたり、文学祭をやったりいろんなことをして自分たちで立ち上がるという努力をやっております。そういうものを、他の県のひとにも県内でも他の町の人たちにも見てもらいたい、交流したい。そういうことを私は何かとお勧めするし、県からもできるだけの援助もしたいなと思っています。

ここで一つ提言があります。今こうやって北海道を入れまして神奈川、福岡ということでパネルデスカッションということになっておりますけれども、こうした地域づくりの実例集を一冊にまとめられないか。例えば北海道、神奈川、福岡と一冊にまとめて全国の人にアピールできないだろうか。そうすると、それをもとにしましてきっかけになって全国の人が来てくれとか、あるいは福岡にいくよと、こういうようなきっかけにならないだろうか。地域おこし、人作りの事例集をつくることはできないか。そして、そういう活動、あるいはリーダーの交流をできないだろうかというのが私が今ここで行いたい提案です。

長洲知事も、そういう方面にお触れになったかと思いますが、おそらく賛成していただけるのではなかろうかという気持ちであります。

---

#### 職員同志の積極的な交流を

---

それからもう一つ、地方自治体の公務員が活性化してほしいと、私は本当に祈るような気持ちで自治体職員の奮発を期待しております。そしてずいぶん福岡県においても、あるいは福岡県の市町村の中においても自治体職員は頑張ってきているんです。そういう人たちにもっとハッスルしてほしい、あるいはそういう仲間づくりをしてほしいと思うんです。私が知事になった

最初、58年は自主研究グループですね、府内に12グループ155人の自主研メンバーがありました。昨年の4年目には42グループ347人が自主研グループに入っております。こういうひとたちに一々私の方からいろいろな努力をして励ましておるわけですけれども、そういう人たちがもっともっと出てほしいですね。

私は近ごろの自治体の職員というのは、非常にそういうことに目先がきく、努力すれば非常に能力があると思います。私は研究雑誌を出さないかね、というようなことも言っているんですけど、研究雑誌を出すまでに至っていないのが残念ですが、自治体職員が研究雑誌を出してもいいんではないかと思うんです。ヨーロッパなんかに研修に派遣した人たちがレポートを書きますけど、やはり研究雑誌を出してもいいんではないかと思っています。

そこで改めて提案申し上げたいのですが、自主研グループは神奈川県にもあると聞いておりましたが、自主研グループの人たちがお互いにテーマを持ちあって、2泊3日でも一緒に合宿して討論会をしたらどうだろうか。こういう自治研集会もいいんですけども、自主研グループの交流もいいと思っています。

それから、最後に一つピーアールというか知りていただきたいと思いますのは、横浜もそうだと思いますけれども、1989年は市制100年ですね。福岡の場合、アジア太平洋博というのを1989年の3月17日から9月3日まで、1・7・1日間アジア太平洋博「ヨカトピア」というニックネームで呼んでおります。これを聞くので、今、血道をあげてやっております。宣伝もしておりますが、福岡と言うものが、それまでにもっともっと魅力あるところになりたい。そのときにまた福岡の魅力を随分宣伝をしておきたいと思っております。この会場においての皆さんも

その年にはひとつ福岡に来ていただいて、今フグサシの御馳走も画面に出ておりますけれども……。(笑声)

日下部 おいしそうですね。

奥田 ちょうどいいときになりますので、ぜひ来ていただいて福岡のいいところを見ていただくとともに、皆さんのがいいところも福岡に教えていただきたい。そういうよしみを契ることのできる1つのイベントとして福岡のアジア太平洋博覧会がありますので御紹介をさせてください。

それから、その翌年昭和で言えば65年になりますが、1990年、2巡目の第45回国体があります。これは「とびうめ国体」と称しておりますが、シンボルマークもマスコットももう既にできております、「フッ君」というニックネームがあります。今、福岡県を売り出すために、そして福岡の地域を活性化するために全県でうごきはじめています。結局、これを契機に福岡が昔の石炭、鉄の栄えた時代を思い起こしつつその後遺症を克服して、それこそニュー福岡県をめざしていよいよ行くぞという時代になる。ひとつ福岡も全国の皆さんに知っていただいてお互いいいところを学び合おうと。

——この絵は山笠ですね。もう祭りの好きな市民でして、祭りがあれば喜んでおると(笑声)。これは活性化の一つのいい手段だと思いまして、昔の人もそのためにやったんだと思うんで



すよ。何も信仰が厚いからやったんじゃないんじやないかという気がするんですが(笑声)、ともかくそういうことでございます。

来年はソウルオリンピックがありまして、その翌年に福岡のアジア太平洋博覧会——横浜もあるんですね。

長洲 はい。同じ年にやります。

奥田 それからもう一つ、翌年に国体があります。これを契機に福岡県全体が生まれ変わるようにと期待しておりますので。福岡というのはこれからだと、こう思ってひとつ御支援のほどを長洲知事にもお願いしたいと思います(拍手)。

日下部 どうもありがとうございました。それでは、長洲知事にお願いいたします。

#### 自治体の体質改善・

#### リストラクチャリング(転換)を 長洲 知事

長洲 大体奥田知事のお話で第3テーマは尽きてると思いますが、私も御提言に賛成です。やっぱり「地方の時代」というのは、ただ空念仏を言っていてもしようがないんで実力を持っていかなければならない。私は実力というのは2つあると思います。1つは、国の省庁の役人と全く対等に理論的に渡り合える実力、もう一つは民間の人ときちんと対応できること、その両面を持っていないと「地方の時代」だからとただ威張ってみても、実力がなければ笑われるだけだと思います。

奥田知事も元学校の先生ですから、若い人を育てるのは御熱心ですし、私も微力ですけれどもこの12年余りやってきましたつもりです。これからは本当に知恵比べです。東京で研修するのもいいけれども、お互いに学び合うということ

で、私は地方同士で交流する勉強の仕方がとても力がつくのではないかと思います。奥田知事の御提案に賛成でございます。具体的にどうするかは、後でまたお話ししたいと思います。

日下部 ぜひお願ひいたします。

長洲 今夜、御一緒できそうですから（笑聲）、そのときにまた御相談いたしましょう。

御案内かと思いますけれども、「自治体学会」というのを全国の自治体の職員の皆さんで、勉強好きな方、もう2,000名近くになられたんですが、去年横浜で創立総会をいたしました。ことしは日下部先生もいらっしゃって徳島で第1回の総会を開催いたしました。この次は仙台に行ってやります。これは学識者も入っておりますし、市民運動家も入っております。この自治労の自治研ももちろんですがこういう組織にぜひご参加いただきたい。そういうものができるほど、私の見るところそれぞれの自治体で有能な職員が育ってきたと認識しております。

---

#### 自治体革新の原動力は職員

---

神奈川県の場合でも、私は知事になりたてのころから思うと全くさま変わりしていて、意欲的な職員が育っていると思います。経済界の人なんかも、「知事さん、あれ本当に県の職員ですか」というぐらい、民間の人たちと全く対等に渡り合う職員も大勢おります。私はそういう新しい職員をベンチャー職員と呼んでいます。必ずしも本当にハイテクを駆使する技術屋にかぎりません。要するに行政能力、企画能力においてそういう職員がたくさん出ておりまし、奥田知事のお話しの自主研というのも、私が知事になりましたときに推奨して、神奈川では随分グループができております。お金を出すのもあるし、お金なんか知事からもらうと自主

の名が泣くといつてももらわない人もたくさんございます。

私はよくそういう人たちに、「僕は大学にいたけれども大体30代で助教授。助教授というの一番勉強する。教授になると惰性で生きている」まあ奥田教授や長洲教授もいますけど、「そのつもりでやってもらいたい」と言っているんです（笑聲）。

最近は、大学の先生と対等の論文が書ける人が大勢いると思います。いいのがあったら出版社に紹介するからと私は言っているんです。ですから、事例集といったような奥田知事の御提案も、どういう形で実現するかは別にして大いにやりたいと思っております。

いずれにしましても、経済の用語ですけれども、このごろ大企業のリストラクチャリング、体質を全部変えていくというのが行われております、大企業は大企業なりに必死の取り組みをやっています。私は自治体もリストラクチャリングが必要だと思います。新しい領域が、何も経済だけではなくて、文化とか国際交流とか新しい領域もどんどんふえています。教育だってそうだし、まちづくり、それから福祉だっていよいよ高齢化社会が目の前にきている。

そういう中で今までの法律、条例、そして習やはりみんなが知恵を出す以外にないと思います。

そういう点で、きょうのような催し物はとても私どもには勉強になります。ここにお集まりの5,000の皆さん、お互いに学び合いましょう。地方同士で一生懸命考えて知恵を出してありますから、その知恵を学ぶ。しかし物まねはしない。相手の知恵にインスピライヤーされたら自分もそれで燃えてみるとということで、自治体改革をぜひ進めていきたい。その原動力はやはり自憲、これだけでは地元はやっていけないと思



ます。新しい組織も必要、新しい施策も必要、そういうリストラクチャリングをやるために治体の職員だと思います。私ども首長は、そういう空気が自由に出るような場づくりをやる責任を持っていると考えております。ありがとうございました。

日下部 どうもありがとうございました。

ただいま北海道とつながっているようでございますが、お聞こえになりますでしょうか。

鎌田 参事 はい。北海道審議室参事の鎌田でございます。

日下部 ただ今の、長洲知事と奥田知事のお2方のお話を聞き及んでございましょうか。

鎌田 参事 はい。北海道庁内にありますテレビ会議システムの特設会場でもってテレビを拝見しております。

横路知事が横浜の会場とテレビを通じましてディスカッションをするという手はずだったんですが、あいにく北海道におきましては、横路知事になりました初めての長期計画であります「新しい北海道の総合計画」の集中審議がなされており、現在ただいまもその審議が継続しております。大変残念ではございますが、横路知事が、長洲知事、あるいは奥田知事と直接テレビ会議システムによって対談をしたいと大変期待をしておったんでございますが、そういう状況

にありまして知事自身も「申しきわけない、おわびしておいてくれ」ということでございます。お伝え申し上げます。

日下部 それでは、長洲知事から、何かお言葉はございますでしょうか。

#### 十人十色、多様と分権を

長洲 冒頭に申しましたように、私としては地方の時代といいますか、日本の社会を今までのように画一・集権、どこへ行っても同じで「十人一色」というのはもうこりごりしましたから、それぞれの地域が表情豊かでみんな「十人十色」の自由な暮らしをする。欲を言えば「一人十色」ぐらいに仕事もするスポーツもやる、文学もやる、いろんな形にしていきたい。そのためにはやはり「画一と集権」ではなくて多彩と「多様と分権」という、これから日本のあり方を我々の手でつくっていく、その責任はやはり自治体にあると思います。ですから、きょうお集まりの全国の自治体の皆さん、そういう非常に歴史的に重い仕事を我々は現場で担っていくということに、強い誇りと自信を持ってお互いに進みたいと思います。

よく3割自治と申します。確かにそういう面での行財政の改革をする必要がありますし、今は新々中央集権の方向に逆に流れている。そういう点は我々も互いに努力しなければなりませんけれども、しかしながら3割自治といつても、実際は税金の7割が国へ行ったってまた帰ってくるんです。実際、国民のための仕事の7割以上は、予算面でいってもそれぞれの自治体でそれぞれの地方で使っているのです。そういう意味で私は7割自治と言ってもいいと思います。国民の、日本人の本当の暮らしの直接のニーズにこたえていくのは、それぞれの自治体です。

その点にもぜひ誇りを持ち、そして変わりゆくニーズにどう先進的にこたえていくか。それには研鑽を積んで、そして頭もしっかり働かせて知恵を出していく。そういうことをお互いやろうじゃありませんか。（拍手）

日下部 どうもありがとうございました。横路知事がお出になるかと思いましたのでVTRのことを申し上げませんでしたけれども、横路知事のVTRがございますので、今VTRをやっていただけますでしょうか。

地域の活性化のために  
住民と職員のエネルギーの発揮を  
横路知事

横路 北海道は212の市町村があるわけですから、7割が過疎です。それぞれの地域でも先ほどもお話しいたしましたけれども、できるだけ働く場を提供していきたい。若い人が残ってやっていけることのできる地域にしていこうということで、今みんな努力をしております。もちろん、産業といっても農山村地域が強いわけでございますけれども、北海道というのには、どちらかというと今まで原材料を供給する地域ということだったわけです。

まだ北海道では内地という言葉が生きておりますけれども、つまり外地、植民地型の経済構造だったと言つていいと思いますね。ですから、素材は提供するけれども生活の必需品や生産資財といったものは本州から持ってくると。「域際収支」という概念が北海道にありますけれど、これでいいとすると毎年2兆7,000～8,000億円の赤字ということになっております。

今、やはり北海道の中で付加価値を高めていくじゃないか、例えば魚をとってもすり身にするだけで、これが小田原に行ったり仙台に

行って小田原のかまぼこや仙台の笹かまぼこになっているんですね。福岡のカラシメンタイなども、あのタラ子も北海道提供でございまして（笑声）、大阪の塩コンブもそうですね。あげていくときりがないわけです。北海道の人がはいている手袋は四国でつくっているとか、もっと我々みずからできるものをつくっていこうということを1つの大きな柱にして、地域の産業などにも取り組んでいます。

そのためには、もっと自分の足元を見詰め直そうという運動が1村1品運動として展開をされているわけで、自分の足元をよく知るというためには、まず自分たちの町や村はどういう歴史を持っているのかを知るのも大変大事なことです。

そういう中から、江差の北前船の回航という大きなイベントが昨年大成功をおさめました。そういう歴史の見直しを進めていこう、あるいは町の生産物、どういうものが生産されているのかを見直しをしていこう。例えばコンブは北海道の特産品ですけれども、消費が一番高いのは沖縄県民が一番消費量が多いと言われております。もっと我々が生産しているものを大事に見直しをしていこうではないか。

それからまたどういう自然があるのか、水芭蕉というと、東京ですと尾瀬へ行かないと見れないようですが、北海道はそこらじゅうにあるわけでございます。これが大事な観光資源になるなんて考えている人はいないわけですが、最近、本州から来た人たちが水芭蕉、水芭蕉というので、あ、これは大事なんだなと。そのようなことは実は北海道のそれぞれの町や村の中にいる自然としては大変たくさんものがあります。そういう自然を見直しをしていこう。

それから一番大事なことは、町に住んでいる人々ですね。どういう人がいて何をしているの



か、いろんな力を持った人が小さな町や村の中にもおられるんですね。そういう人々を掘り起こしをしていく。そのことが自分の町をよく知ることにつながり町の中の連帯感を高め、町を大切にしていくという気持ちが芽生えてくると思うんですね。そういう中から自立自助の気持ちが、地域活性化というエネルギーが出てくるんだと思います。

#### 問題意識を持つ職員の交流を

私は、各市町村に行ってみて自治体の皆さんにお話を聞きますと、意外と市や町や村の職員の皆さんでも地域の中のそういうことを知らない方がいますね。私はこの4年間の経験で、いろんな町おこしのグループと会って話をしてきて、問題は、そういう人をさらに大事にしながら育していくということが必要なんです。さまざまな小さな活動の中に実は地域を発展させる大変なエネルギーというのがあるんですね。そこを見ていかなくてはいけないと思います。

特に自治体で働いている皆さんにとっては、まさに町をどうするかということは仕事そのものですから、好き嫌いだと食わず嫌いを言わないで、町の中にある一つ一つのいろんな小さな動き、それはどんな小っちゃなサークルでもどんなことでもいいわけですけど、何かやろうという意欲を持ってやっている人たちを大切に

していくということが一番必要なことではないかと思います。

そういう人たちが本当に町の中に2人か3人、そんなエネルギーがあったら町というのはものすごく大きく変わります。しかし、そういうエネルギーを抑え込んでいるところではやはり町に入っても生き生きとした動きというのは見られないですね。それは本当に町役場の職員の皆さんのお気持ち一つですね。町長がどうとか何がどうとかというような偉い人の話ばかりではなくて、やっぱり役場の窓口になっている人たちがそういうエネルギーを大事にしていく、育てていくということだと思います。

私は、道府県の職員によく言っているんですけども、我々の仕事は何かというと、それは産業経済ばかりではなくて文化でも福祉でも、何かやろうといって努力をしている、新しいことに何か挑戦しようとしている、いろんな制度や仕組みの中で、しかしそれを超えてやっていくと頑張っている人をどうやって見つけて、それを伸ばしていくかということだと思います。

これをどうやって見つけるのかということが一番問題ですけれども、机に座ってたんでは見つからないんですね。地域の中に飛び出して行くということが大変大事なことではないかと思います。

何によらず、いつも問題意識を持っていれば新聞の記事1つ雑誌の記事1つでもいろんな情報を得ることができます。私の情報も、やはり新聞とか雑誌から得ることが一番多いわけでございまして、そこをよく調べていくと、いろんなつながり、展開が出てくる。あるいは私のところにもたくさんの手紙や投書だとかいろんなものがきます。そういう手紙や投書なども一つ一つ丹念に見ていく中から、自分でもいろいろやってみた、悪戦苦闘して何か少しバックアッ

普してもらいたい、こういう人は大いにバックアップしてやっていきたいと思って、そんな心がけでやっております。私ども職員にも、ともかく人を見つけて育てることが大事なんだということを申し上げております。

こうして神奈川、福岡と一緒にこういうお話をする機会が得られまして本当にありがたいことだと思っております。私どもの職員も民間に派遣したりしていろいろ研修をしています。やはりよその世界を知るということは自分のことをよく知るために一番大事なことなんですね。ですから、そんな職員の交流だとか、あるいはお互いに何か蓄積している試験研究機関の蓄積というのも、北海道としても1次産業を中心としていろんな蓄積がございます。何か共通の課題で交流することができればというように考えております。

日下部 どうもありがとうございました。  
それでは奥田知事、いかがでいらっしゃいますか、最後に一言お願ひいたします。

奥田 一口に言って、先ほど来繰り返しておりますけれども、チャーミングな魅力のある県、魅力のある市ですね、そういうものを私は心がけていきたいと思っております。人間もううだと思います。あの人は魅力があるということが大事なんじゃないかと思います。そのためにはやっぱりお化粧も必要なんですが、欠点はできるだけ修正し直していく、そして長所はどんどん伸ばしていくというのが私は県政だと思うんですね。ですから、福岡へ一遍行ってみたいと、あるいは行ってよかったなと。北海道知事が札幌について最初に申されました、そういうところにしていくことが必要ではないかと思います。

そのために一番大事なのは、地域では活動家を育てていく、県庁とか自治体の中では立派な

公務員を育てていくということ、つまり人づくりが一番大事な問題ではなかろうかと思います。そのために、私も知事といたしまして大変責任を感じております。地域での活動家、あるいは県職員の活性化ということに最後の言葉を置きまして私の意見を終わりたいと思います。  
(拍手)

### 自立と共生の地域社会の構築を

日下部 ありがとうございました。

残念なことに時間も迫ってきたようだございます。お三方のお話を伺っておりますと、本当に21世紀に向かって夢と希望を持って生き生きと躍動する地域社会のイメージというものが次第に浮かび上がってくるようでございました。

そしてまた、お三方とも非常にピーアールがお上手でいらっしゃいまして、私、北海道にも行きたくなりましたし、福岡にも住みたくなりました。私は神奈川県民でございますけれども、神奈川も大変魅力と活力があるところでございますが、北海道や福岡に本当に伺ってみたいたいという気がありますますして参りました。

今は、本当に地域というのは大変な問題を抱えております。いわゆる中央集権体制がもう一度復活してくるような新たな形での新国家主義という傾向も見えております。そういう時期に当たりまして、お三方によるテレビ会議が、自治と分権と参加という地方自治の理念を更に具体化して、地域の自立と共生を目指す新たな飛躍のエネルギー源、あるいは原動力となりますことを心から祈っております。きょうお三方によつて提起されました問題を、会場にいらっしゃいます皆様がたがそれぞれの地域にお持ち帰りになりまして、更に深く、大きく発展させていただきまして、そして自治体と自治体、職

員と職員のネットワークと言うものをさらにさらに広げていただきたいと思います。

これから21世紀を目前にいたしまして、障害を持ったもの、持たないもの、あるいはお年寄りも若者も、男性も女性もお互いに分断されることなく、それぞれの人生を本当の人生の最後までプライドを持って生きられるような、共に生きられるということ、そういう本当に豊かな地域社会が今問われているのではないかと思います。言葉をかえますと、自立と共生の原理によって地域社会を再構築していくことが今せまられているような気がいたします。それはまた、地域と地域、あるいは自治体と自治体を結び、更に国という枠をこえましてグローバルに人類を結ぶ、その基本的な原理でもあると私は思います。きょう、お三方のお話を伺いながら、そのことを改めて私は感じさせていただきました。

本当に限られた時間にもかかわりませず、中味の濃い、そして大変示唆に富むお話を伺うことができまして、心からうれしく思っております。本当にありがとうございました。（拍手）

それでは、北海道の横道知事にどうぞ宜しくお伝え下さいますように。

鎌田 悪かりました。どうもありがとうございました。（拍手）

日下部 ありがとうございました。  
それでは、これをもちまして3知事によりますテレビ会議を終わらせていただきたいと思います。

本当にご協力をありがとうございました。

（拍手）

（このシンポジウム「三知事テレビ会議」は、1987年10月14日に横浜文化体育館で開かれた第22回地方自治研究全国集会全体会議のメイン行事として行われたものです。）

北海道の横道知事が議会開催中のため横浜へ来られなかったため、NTTの電話回線により横浜と札幌を結ぶ「テレビ会議のシステム」を利用しました。会場舞台正面には縦4.5m、横6mのプロジェクターが据え付けられ、会場内での討論の実況と、北海道からの映像がこの巨大なスクリーンに投影されました。

なお、この稿は、会場内に放映された録画をもとに記録としました。したがって、文責はすべて編集者にあります。）



第22回全国自治研全国集会記念行事

1987年10月14日

於 横浜人形の家、赤いくつ劇場

## 国際シンポジウム

### 「地球人あつまれトーク・トーク・暮らしと参加」

5ヶ国から5人の提起を

司会 渡辺武達 教授

司会（渡辺武達） こんばんは。「地球人よ集まれ」というキャチフレーズで、「トーク・トーク・暮らしと参加」というタイトルの国際シンポジウムを行いたいと思います。

きょうは第22回自治研全国集会の記念行事といたしまして、ここ横浜で企画いただきました。

きょうは気楽な形で、地方自治体で働いていらっしゃる皆様方とともに、外国人が日本の中で暮らしてどうした問題をお感じになっていらっしゃるのか、そして今、国際化、国際化と言われる中で、私たち日本人がどのようにこの問題を受けとめて、よりよい社会をつくるために具体的に何がしていけるのかということのヒントとして、きょう話し合えたらと思っております。

最初に御出席の皆さんを御紹介させていただきます。

横浜で医院をなさっているアフメット・アルテンバイ先生でございます（拍手）。故国トル

コから1924年に日本にいらして、戦争中は東京の火事をバケツで消した経験があるという大変な方でございまして、私どもよりも日本のことによく御存じの方でございます。

続きまして、リチャード・ウォミントンさんでございます（拍手）。先生は、相模原市にお住まいです。今、中学校の英語の教師をしていただいております。オーストラリアのメルボルンの出身ですけれども、ここにございますように、輸入食品のセールスマンをなさったり数学の教師、あるいはタクシーの運転手さん、いろいろな経験がございますので、またお話ししたいだきたいたいと思います。

志賀リンデさんでございます。（拍手）

志賀さんは西ドイツから来ていただいておりますけれども、1967年から日本にいらっしゃいまして、御主人がちょうど西ドイツに建築関係のお仕事で赴任されたときにお知り合いになって結婚されて日本に来られたということでございます。「日本人の外国人妻の会のメンバー」ということでございますので、教育の問題とか、あるいは自治体の接触の問題などについて後からお話をいただきたいと思います。

続きまして、オー・ケンエイ（区建英）さん

でございます（拍手）。オーさんは、今、東京大学の方へ留学をしていらっしゃいまして、現在、日本近代思想史文化史というものを研究していらっしゃいます。中国の若い学界のホープということで、これから日本と中国を結ぶ研究をたくさん発表していかれる方でございますし、学校生活を通して日本の学問のあり方とか、日中の文化交流についても後からお話しただけるのではないかと思います。

中村ベバリーさんでございます（拍手）。中村さんもアメリカから日本に留学をされまして、およそ19年日本にいらっしゃいます。日本の方と結婚されまして、「日本人の外国人妻の会」の大変有力なメンバーで、元会長でいらっしゃいます。今、日本の中で外国人が暮らすとき、特に結婚して暮らす場合に大変な問題がたくさんございます。名前の問題とか、さまざまな法律の制約がございますが、そうしたことも含めて後ほどまたお話しをいただきたいと思います。

私は、本日のシンポジウムで司会を務めさせていただきます京都産業大学の渡辺と申します。よろしくお願ひいたします（拍手）。

私自身、これまで外国に120～130回出ておりまして、訪問した国も100カ国以上になります。たまたま市民運動とか人権拡大の運動などもしておりますので、きょう司会の役を仰せつかったのではないかと思っております。

本日の会合は、外国人の方が日本の中でお暮らしになって、日本がより友好的な国際社会への仲間入りをする、そういう点からの問題点をざくばらんに出していただく。比較的小な会場ですし、また雰囲気もやわらかな感じになっておりますから、そんなことからお話をいただきます。

運び方いたしましては、地方自治体に関するこを少し触れながら、そして御自身が日本

でお暮らしになっている問題点と、自分のお国で問題が起こった場合、その場合はどうしているかということを踏まえながら、それぞれ10分ぐらいでお話しいただきます。そして私がそれについてコメントを加えたり質問をしたり、皆様方の御質問を受けたりいたしますので、よろしくお願ひします。

それでは、アルテンバイ先生の方からよろしくお願ひいたします。

### 医師の車の駐車違反の緩和を

トルコ アルテンバイ氏

アルテンバイ 何を……（笑声）。

司会 私より日本のこととは詳しいお医者さんでございまして、日本の保健の問題などたくさんおっしゃりたいことがあるんですね。それで、10分で話せと言いましたら、それは無理だとおっしゃいましたが、そこを何とかお願ひしたんです。

よろしくお願ひします。

アルテンバイ まず、何か聞いてくださいれば……。

司会 先生の御出身はトルコなんですかとも、どうして日本に来られたかというところからちょっと話していただけますか。

アルテンバイ これは別に僕が悪いのではなく両親が連れてきちゃったので、たまたま……（笑声）。それから、小学校から日本の学校へ行っていますから、まあ何とか大学も出て医者をやっておりますけれどもね。

何か文句を言いたいということなんでしょうけれども、今までのところ、僕は医者ですから交渉があるのは保健所とか検疫所ですが、そういうところはみんな非常にやさしく、いいです

よ。あとは警察の問題ですが、これは言つてい  
いのかな。

司会 いいですよ。

アルテンバイ 交通課の婦警さんというの  
は、どうしてああ型どおりなのかなという気は  
しますがね。殊にその一番お偉い方、非常に  
悪く言えば、何か問題があつて行きますと、親  
のかたきを迎えるような顔で見ます。もう少し  
やさしく話をしても、話はわかると思うんです  
けれども。そういうところがあるので、それだけ  
は不思議なんです。

一つ日本で不思議に思うのは、恐らく外国では、医者というものは急患があるときはどこへ  
駐車してもいいと思うんですが、日本では、彼らが知らないのか、それともそういうものがないのか、一般人と同じに駐車違反として管理されています。この点は少し不思議に思うんです  
けれども、文句を言うのはそれだけですよ。

司会 先生は日本の大学を出られて、慶應  
大学で医学をされたと伺っております。今は警  
察に対する文句を少しおっしゃいましたけれど  
も、お暮らしになっていて特に不便を感じてい  
らっしゃるとか、役所関係で何かございますか。

アルテンバイ いや、ありませんですね。僕  
らは外人ですから、3年に一遍、これも今度は  
5年に一遍になりましたけれども、区役所へ  
行って滞在許可の証明書を更新することはあり  
ますけれども、15分ぐらいで簡単にすぐやって  
くれますよ。

司会 今、おっしゃっているのは皮肉も多  
少あると思うんですけども（笑声）。

アルテンバイ あれっ。

司会 外国人登録法のことございます  
ね。地方自治体の方ですから十分御承知ござ  
りますから、そのことについてもまた、多分ほ  
かの方から出ると思います。アルテンバイ先生

は余りにもよく知つていらして、来日が1924年  
ですから、もう滯日60年……。

アルテンバイ 余り言うと年がばれる……  
(笑声)。

司会 最初の何年かは不満を持ちまして、  
そしてだんだん、これは言つてもしようがない  
んだ、日本人はなかなかやつてくれないとと思  
つてあきらめられた場合もあるでしょうし、そん  
なことも踏まえてまたもう一回お話しの事にいた  
します。次にオーストラリアからの  
ウォーミントン先生、この先生はまだ半年です  
から相当におっしゃると思いますけれども、ど  
うぞ。

### 職場の親睦旅行は日本特有

#### オーストラリア、ウォーミントン氏

ウォーミントン 皆さん、こんばんは。リ  
チャード・ウォーミントンと申します。よろしく  
お願いします。

32歳で、4人の男兄弟の長男です。オースト  
ラリアのメルボルン市出身です。私は、日本  
に興味があって、ツウンバ大学で日本語を勉強  
していましたが、私の恩師である町田先生から  
英語の先生として働いてみないかと誘われて、  
これはいいチャンスだと思って日本に来ました。  
ことしの4月から相模原の中学校で英語の  
教師のアシスタントとして働いています。自  
治体については、オーストラリアでは自治体が  
900あります。オーストラリアの人口は約1,600  
万人ですから、平均人口は約2万人です。だか  
ら、オーストラリアの自治体は日本より小さい  
と思います。オーストラリアの自治体の役割  
は、ごみ収集、公園管理、衛生管理、駐車取り  
締まりなどです。



リチャード・ウォーミントン (Richard Warmington)  
 1965年1月10日生れ  
 オーストラリア  
 在日 1987年1月  
 職業 英語教師助手

社交的なスポーツをするのが好きですが、特にテニスが好きです。  
 オーストラリアではハイキング、サイクリング、キャンプなどで楽しみましたが、日本でも見物がてら同様にしたいと思っています。  
 まだ、自然の材料を使って料理するのも好きです。SHIZEN-SHOKU  
 オーストラリアでも日本からの輸入食品のセールスマン、数学教師、タクシー運転手など様々な職業につきました。  
 (相模原市在住)

ところが、日本と違って学校教育は自治体じゃなくて州が管理します。私はオーストラリアの市役所の窓口に余り行きませんでした。一度駐車違反の罰金を払いに行きました。オーストラリアのある地方では投票は強制ですが、ほとんどの地方は自由意思です。

日本に来て困ったことは、日本の建物は全部私には小さくできているために頭をよくぶつけたことです（笑声）。最初の2カ月ぐらいは毎日のように頭のてっぺんにすり傷ができていました。

教育委員会に勤めて市役所で働くときに気がついたことは、女性は忙しくてもお茶を入れなければなりません。不公平だと思いました。オーストラリアは大体お茶を飲みたい人は自分でお茶を入れます。

数カ月前に教育委員会の人たちとマイクロバスで伊豆に行きました。土曜日の晩、温泉に入ってから宴会を行いました。お互いを知るよい機会だと思いました。オーストラリアではそういう職員旅行が余りありません。週末にオー

ストラリア人は友達や家族と一緒に過ごしますが、私は日本のような親睦会はとてもいいことだと思いました。宴会については、食べ切れないほどの料理が出てもったいない気がします。またべろべろに酔っ払って、何だかわけがわからなくなつて終わる日本のような宴会は、オーストラリアにはありません（笑声）。

でも、オーストラリアでは、年1回から2回ぐらい職場の仲間で夕食会を行います。その夕食会に出るか出ないかは個人の自由です。その夕食会ではビールを飲むことが多いです。だけど、飲むか飲まないかも個人の自由です。ただ、オーストラリアは世界で3番目にビールを飲む国だから、ビールを飲む人が多いと思います。それから職場の仲間で仕事が終わった後、特に金曜日によくバブに行きます。また個人で行って、バブで別の人と飲むこともあります。

日本の宴会ではたくさんの食べ物を注文して、食べ切れないので残ってしまうものがあって、むだが多いと感じました。日本では、酒を飲まない人は出世できない（笑声）ケースもあるそうですが、「オーストラリアの場合はどうですか」と聞かれましたが、次のようなエピソードがあります。

ある青年は、ビール早飲み大会で新しい記録をつくりました。この人は後でオーストラリアのACTUという労働組合の連盟のプレジデントになりました。そのころ彼は大酒飲みとしてよく知られていましたが、彼は出世の道を選ぶために今まで好きだったお酒を断ってしまいました。1980年には彼は選挙でオーストラリアの首相になりました。今ではホーク首相はジュースしか飲みません（笑声）。これはジョークではありません。

私が日本の学校で英語を教えて感じたことは、まず、日本の英語の先生は非常に英語が優

れています。本を読むと日本の英語の先生は話すことが下手だというような印象を受けていましたが、相模原で実際に英語の先生と会って話してみると、彼らはとても英語が上手でした。これは一つの驚きでした。

それから、オーストラリアの場合ですと、先生がいなくて自習のときは、学生たちは全然勉強なんかしないで、その時間はずっと騒いでいます。だから、オーストラリアでは、自習になるときはほかの先生がかわりに彼らを教えに行きます。日本の子供たちは先生がいなくても一生懸命に勉強しています。これも私の驚きの一つでした。

この違いは、多分しつけにあると思います。日本の子供たちは先生に尊敬の念を持っていますし、また、受験も一つの理由となっているんじゃないでしょうか。ありがとうございました（拍手）。

司会 どうもありがとうございました。

次に、志賀・リンデさんに今の外国語教育も踏まえてお話しいただければと思いますので、よろしくお願ひいたします。

### 画一的な日本の教育に問題あり

西ドイツ、志賀リンデさん

志賀 志賀リンデです。20年前にドイツから日本にきました。そして最初は大阪の方で、後で横須賀の方で、そして埼玉の方で、大抵社宅に住んでいました。そして教育のことは特に興味があります。なるべくいい教育を受けさせたいんですけど、自分の足で学校に行けて、いい教育を受けられるようになってきてほしいんです。

この20年の間に、主人の仕事のことでの3年前

に香港に1年間住んでいました。子供たちはあっちの日本人学校へ行きました。それは子供たちのためにすごくおもしろい経験だったと思います。やはり香港と日本ではちょっと違うんです。

1つは、特に日本のクラスは生徒の人数がすごく多いと思います。今、鎌倉では45人単位で、46人もあります。私が授業参観日に行くと、すごくぎやかで、先生も生徒たちも大分疲れるんじゃないかと私は心配しています。そして、特に小学校の方はスピーカーでいろいろなアナウンスも来ます。大きな声で。今は技術的にいろいろよくできているのでどうして必要な教室だけボタンを押して放送することができないか。どうして学校全員聞かなければならないんですか、私はほかの人には迷惑だと思います。そして、よくドアも閉めていないことも多いみたいだから、廊下の音がみんな入ってくるんです。

例えは香港は、特に中学の方は、クラスの生徒の人数が少なかったんです。30人ぐらい。だから先生は何でも生徒たちと相談して決めたんです。そして日本に帰ってきたら、音楽の先生、「あなた指揮者をやりなさい」と指名します。うちの子供はすごく不満そうだった。ほかの生徒たちは、多分違う人の方が適任だと思っていたかもしれないんです。それが一つでした。

そしてもう一つ、日本のクラブ、特に中学と高校はほとんど毎日です。日曜はない場合もあるんですけども、ほとんど毎日。例えば香港でしたら、普通のクラブは週2回でした。後で同好会がありましたから、同時に好きな違うクラブに入ることができたんです。例えば普通はバスケットボールでしたら、違う日に卓球をしていいんです。日本は大抵全部一つのクラブ、それを選ばなければならないんです。

子供の話ですが、日本には人数が余りに多い



**志賀 リンデ (Shiga Linde)**  
 1937年7月5日生れ  
 西ドイツ  
 在日 1967年（1983—1984香港在住）  
 職業 ドイツ語教師、主婦

私の趣味はコーラス・墨絵・書道。ピアノも数年来学んでいます。勉強することが好きで、今、中国語を習っています。

私は外国人の主婦達のグループ（36人）のメンバーで KAIWA やコーラスは大変楽しいです。大船の教会のメンバーでもあります。

現在、建築技師の夫・高2・小6の2人のむすこに囲まれて毎日楽しい生活を送っています。  
 （鎌倉市早瀬在住）

から、2人、3人欠席しても友達じゃないと気づかないんです。そう考えると寂しいことじゃないですか。高校2年生はベビーブームの子供ですから、特に人数が多いんです。その後の子供たちは人数が減っていくんで、クラスの数を増さないと言われていますけれども、私は、それはベビーブームの子供たちに対してアンフェアじゃないですか、と思います。だから、クラスをもっとつくったら、もっとたくさんの先生がいましたらいいと思っています。

市役所に対しては全然違う話があるんです。本当は、日本の仕組みを見るとすごく厳しいところがあるんですが、すごく甘いのもあるんです。

これは一つの例です。うちの裏には大きな古い建物があったんです。アパートみたいな、古いのでぼろぼろしていた建物でした。そして4年前ぐらいに、半分壊されたんです。私たちはみんなどうなるか見ていました。すると、壊されたところに前より大きな新しいビルが建てられたんです。そしてあの半分はどうなるんでしょうか。これ以上建てるに特にうちの4軒の

中ですごく暗くなります。本当は新しいビルだけになったらまだいいんですけども、それ以上建ったら問題だと特に主人は言っていました。土木技師ですから。

そして、近所の人もいろいろな人がそういうことで市役所の方へ行ったんです。それはダメじゃないですか。主人も一度行ったんです。そうすると市役所の方から、あの半分は後で壊されるからいいと言うんです。その上に「近所同志で仲よくしてください」と言われたんです。

ところが後になったら、古いところはやはり壊されなかつたんです。建て直したんです。新しいビルディングができるから、古い分も建て直したんです。だから、この「仲よくしなさい」は何でしょうか……。そういう点ですごく甘いんじゃないですか、と。法律は私は大切だと思っているんです。

そして、日本には町内会などいろいろあります。そしてボランティアの仕事が多いと思います。大分前に日本に来たんですけども、ドイツにはそういうことが少ないと思います。日本を見ると、やりたくない人はやらなくてもいいと思います。けれども、本当は市民としてみんなが何とか協力したらしいことだと思います。

**司会** ありがとうございました（拍手）。

日本の学校の1クラス当たりの生徒数がちょっと多過ぎるのではないかというお話をとか、ベビーブームの世代は大変に生徒が多いから、何らかの形で教員を増やすことを考えなければいけないんじゃないかというお話をございまして、専門の方がここにいらしたら後から御回答をいただいたり、お話ししただければ大変ありがたいと思います。

もう一つは鎌倉市役所の例をお話ししていたいたんですが、建築基準法の建ぺい率の違反、あるいはそこの指導要領の違反のことを持



志賀 リンデ (Shiga Linde)

1937年7月5日生れ

西ドイツ

在日 1967年 (1983-1984香港在住)

職業 ドイツ語教師、主婦

私の趣味はコーラス・畳縫・書道。ピアノも数年来学んでいます。勉強することが好きで、今、中国語を習っています。

私は外国人の主婦達のグループ(36人)のメンバーで KAIWA やコーラスは大変楽しいです。大船の教会のメンバーでもあります。

現在、建築技師の夫・高2・小6の2人のむすこに囲まれて毎日楽しい生活を送っています。

(鎌倉市早瀬在住)

から、2人、3人欠席しても友達じゃないと気づかないんです。そう考えると寂しいことじゃないですか。高校2年生はベビーブームの子供ですから、特に人数が多いんです。その後の子供たちは人数が減っていくんで、クラスの数を増さないと言われていますけれども、私は、それはベビーブームの子供たちに対してアンフェアじゃないですか、と思います。だから、クラスをもっとつくったら、もっとたくさんの先生がいましたらいいと思っています。

市役所に対しては全然違う話があるんです。本当は、日本の仕組みを見るとすごく厳しいところがあるんですが、すごく甘いのもあるんです。

これは一つの例です。うちの裏には大きな古い建物があったんです。アパートみたいな、古いのでぼろぼろしていた建物でした。そして4年前ぐらいに、半分壊されたんです。私たちはみんなどうなるか見ていました。すると、壊されたところに前より大きな新しいビルが建てられたんです。そしてあの半分はどうなるんでしょうか。これ以上建てるに特にうちの4軒の

中ですごく暗くなります。本当は新しいビルだけになつたらまだいいんですけども、それ以上建つたら問題だと特に主人は言っていました。土木技師ですから。

そして、近所の人もいろいろな人がそういうことで市役所の方へ行ったんです。それはダメじゃないですか。主人も一度行ったんです。そうすると市役所の方から、あの半分は後で壊されるからいいと言うんです。その上に「近所同志で仲よくしてください」と言われたんです。

ところが後になつたら、古いところはやはり壊されなかつたんです。建て直したんです。新しいビルディングができるから、古い分も建て直したんです。だから、この「仲よくしなさい」は何でしょうか……。そういう点ですごく甘いんじゃないですか、と。法律は私は大切だと思っているんです。

そして、日本には町内会などいろいろあります。そしてボランティアの仕事が多いと思います。大分前に日本に来たんですけれども、ドイツにはそういうことが少ないと思います。日本を見ると、やりたくない人はやらなくてもいいと思います。けれども、本当は市民としてみんなが何とか協力したらしいことだと思います。

司会 ありがとうございました (拍手)。

日本の学校の1クラス当たりの生徒数がちょっと多過ぎるのではないかというお話とか、ベビーブームの世代は大変に生徒が多いから、何らかの形で教員を増やすことを考えなければいけないんじゃないかというお話がございまして、専門の方がここにいらしたら後から御回答をいただいたり、お話をしただければ大変ありがたいと思います。

もう一つは鎌倉市役所の例をお話ししていましたが、建築基準法の建ぺい率の違反、あるいはそこの指導要領の違反のことを指

摘したら、お隣り同士ですから仲よくやってくださいと言われたというんですね。ある意味では非常に日本の解決策を市役所から指摘されて、法律を守らなければいけないのではないかという御指摘もありました。体験的に解決していらっしゃる方がもしいらっしゃいましたら、後から御提起いただければ大変ありがたいと思います。

次に、オーさんにお話を伺いたいのですけれども、よろしくお願ひします。

### 同化を求めず、違いを大切にして

中国、オー・ケンエイさん

オー 御紹介いただきましたオーケンエイでございます。中華人民共和国から来ました留学生で、日本に来る前に中国の大学の歴史学部で少し教えました。今は東京大学の博士課程在学です。

ちょっと中国の状況を皆さんに簡単に御紹介いたします。

皆さんもよく知っていると思いますが、中国の最大の特徴を、2つぐらいにまとめますと、まず1つは大きいということですね。面積は960万平方キロで、人口もまだ11億になっていませんけれども10億数千万になっています。そして、2番目の特色といいますと、やはり多様性に富んでいることです。中華民族といいますと56の民族です。そして、56の民族はともに生活していますけれども、文化、生活習慣、風俗、服装、踊り、歌、祭、全部違うんです。そして、みんな違うんですから、楽しみに生活しています。

中国は自分と違っているものを大事にするのが特徴で、同化の傾向はありません。私が日本に来てすごく感じているのは、日本は、最初は

幾つかの民族ですけれども、やはり同化の傾向が強くて一つに見えますね。

もう一つ、中国の昔と現状を言いますと、長い歴史があるのは皆さん御存じだと思いますけれども、かつての文明大国は今は発展途上国にということです。いろいろ歴史の問題がありましたから、今、中国の若者は、昔の歴史から自覚して自分の国の発展を図ろう図ろうとして、そして国際理解、平和安定を図ろうとして世界各国へ留学しています。私も中のひとりです。

私はなぜ日本に来ましたかというと、今まで日本の研究をやっていて、なぜ日本はこんなに短い時間でこんなに早く発展したかということを知りたい、日本の社会、日本人間を知りたい、勉強したいという気持ちがありました。そして今の時代は相互協力、平和安定がなければなかなか発展できませんので、昔の歴史を考えると、やはり相互理解を促進するという気持ちで日本へ来たんです。最近、日本は国際化、国際化と言っていますので、中国からの私費留学生もどんどん増えています。彼らの大多数は私と同じ気持ちで来ていると思います。

日本は地方自治体があるんですが、中国は日本と違って、地方自治はとっても弱い国で、少数民族だけは自治権を持っているんです。漢民族はどこでも自治権がないです。だから、自治体については余りわかりませんけれども、日本社会を入りますと、1カ所に住んで、必ずこの地方自治体とつき合うことになっているんです。

私は日本に来て2カ所に住んだ経験があります。川崎市と東京港区。まず自治体との接触は手続の方面的のつき合いですね。外人登録とか健康保険とか、登録済証明書を学校に出すために書いてもらうときだけで、余り行っていません。東京で1年間では4回ぐらい行っただけで余りつき合いはありません。手續ですから、な

るべく簡単でうるさくない方がいいと思いますが、よかったです。

川崎市ではもっと短い6ヶ月ちょっとの経験ですけれども、手続のつき合いばかりでなく、つき合はいもっとほかの分野にも広まったんです。

最初に、川崎市は、瀋陽市とは姉妹都市ですから瀋陽市の代表団が来ますとパーティを開きます。私はその国際親善のパーティに呼ばれたり、また、ボランティア通訳の研修会にも呼ばれたりするんです。その後どんどん広まって、いまでは労働組合の皆さんと仲よくつき合って、通訳もやったり、中国講座もやったりしています。また、自分の生活の中で困ったことを話しましたらすぐ親切にやってくださるんですね。

だから、手續ばかりでなく、いろいろの面のつき合いも必要じゃないかと思います。私は日本人の人を理解するために来ましたから、こういう機会があって非常によかったという感じです。

私は非常に川崎市で恵まれていますから困ったことはありません。けれども私たちには中国の留学生の私費留学生のネットワークがありますが、そこでたびたび彼らからいろいろ文句を聞きます。東京に住んでいる人が多いのですが、彼らは私と同じように手續の時間だけ自治体とつき合うだけで、ほかの時間は全部自分で頑張っているんです。だから、うるさくないという感じは同じで、けれども、困ったとき、面倒を見てくださる人がいないんです。

例えば例を一つ挙げますと、アパートを探すことです。私も日本語をしゃべれない留学生に頼まれて大家さんに電話をすることが何回もありました。そして、電話をするとまず聞かれるのは「日本人ですか、外国人ですか」という質問、決まった質問ですね。それから、「外国人です」と言いましたら、非常に丁寧に「お断り



オウ ケンエイ (Ow, 建英)  
中国  
1972年8月 広東省実験学校(高等学校)卒業  
1973年8月 広州市外国语学校(日本語専門)卒業  
1973-1978年 広州市外国语学校日本語教師(五年間)  
1978年9月-1982年1月 広州市外国语学院(大学)日本言語文学専門  
1982年2月-1984年12月 北京師範大学大学院歴史系日本近代思想文化研究  
1984年12月-1986年3月 暨南大学歴史系外語系講師  
現在 東京大学大学院総合文化研究所留学(五年間予定)(アジア地域文化研究、中日文化の比較)  
1982年からしばしば、中国の幾つかの雑誌で史料の翻訳や、論文などを発表している。  
(川崎市宮前区在住)

いたします」という返事。だから大変困って、そしていろいろ資料を調べますと、アパートで外国人を受け入れる場合も、まず英語系の人が一番先に受け入れられるんですね。だからアジアの留学生、黒人の方はもっと困るんです。そして、アルバイトを探すときにも大体同じような状況が出ます。

そして、大家さんに「なぜ外国人ならダメですか」と聞きますと、大家さんは、「大家さんは親です。親は余りあいさつのできない人、いろいろ常識知らない人は歓迎しません」と。非常にショックを受けます。さっき言いましたが、中国は自分と違ったようなものを大事にするのが習慣ですから、同じものを要求されてびっくりします。この経験から考えますと、日本は外来文化を導入するとき非常にオープンですけれども、外国人を受け入れるときはまだ閉鎖的な面があるんじゃないかなという感じがします。

私は国際親善パーティにも呼ばれましたが、それを見ていて、国の客様として、あるいは姉妹都市の客様として呼んでくる人には非常に親

切にやってくださるんです。パーティも盛大なパーティで、ビールも飲み切れないような状態です。ホテルも立派です。しかし、個人として来ている人に対しては、政府、役所からなかなか対策はないみたいです。みんな自分でやっているわけです。

私の考えでは、私たちはこの社会に入って、この目でこの社会を見て、この耳でこの社会を感じますから、本国の人は一番私たちの話を信じているわけですよ。ただ代表団、客様として訪問した人の話じゃなくて、私たちの話をむしろ信じます。だから、留学生でもいいし、個人として来ている人は、むしろ国際理解、国際親善のとても重要な要素ではありませんか。無理な話かもしれませんけれども、役所はもっと個人的に来ている人の面倒も見た方がいいんじゃないかという気がします。

そして私が感心しましたのは、日本の民間人ですね。例を一つ挙げますと、留学生相談所というのがあります。それは、ボランティアの日本女性の組織で、言葉の知らない留学生のためにアパートの情報とかアルバイト、あるいはいろいろな情報を与えてくれるわけです。そして留学生も大分助かっています。非常に感謝していますし、非常にいい印象を持っています。

ただ、私の考えは、民間に任せるのはもちろんよいのですけれども、民間人は大変ですね。だから、もし役所の方も何かやってくださればいいんじゃないかな。無理な話かもしれませんけれども。

そして、中国と比較しますと、中国は大分立ちおくれていますけれども、外国から来る人、留学の人も大分来ています。客様として紹待する人もいますけれども、手続は日本と大した差はありません。大体同じで昔はうるさかったんですけども、今はうるさくありません。た

だ、客様として紹待する人ばかりでなく、留学生も、どんな人でも、政府とか一中国は自治がないですから、市も政府、区も政府、全部政府の方に外務省のオフィスがあります。そのオフィスは必ずお正月とか祭日とか、いろいろな休日のとき、外国人のためにレセプションを催したり、観光旅行を組織したり、いろいろ懇談会をやったりしています。だから外国に住んでいるという厳しさはだんだん薄れていくんですね。日本に来て、日本語をしゃべって上手にいさつできる人はすごく恵まれますけれども、できない人は大変困るんですよね。

そしてもう一つ感心しているところは、役所の窓口へ行くと、非常に親切に、そしてとても速くやってくださる。とても感心しています。中国は社会主義国で人民に奉仕するというのが原則です。だから、親切にやってくれるのは当たり前ですけれども、中国の役所の人は威張ったり怠けたりする人が多いんです。だから、日本に来てびっくりしてね。別に商売関係、銀行やレストランでもないですけれども、役所の職員は親切ですねと非常に感心します。本当にいい印象を持っています。

でも、不満を言いますと、最初に外人登録のときに指紋をとられたんですね。びっくりして、ショックを受けるという感じでね。中国では今は余り指紋を押すことはありませんけれども、古い社会、昔の社会、全然読み書きの知らない人は、高利貸しから借金をしたりするときサインできない、文字を知らない、文盲ですから、また悪いことをした人は、こう（指紋を押す）やられるんですね。私は留学に来たんですね。どうしてとられるのか、非常にショックを受けたんですね。これは別に日本の方が意地悪とは思いませんけれども、こういうやり方は非常に悪い印象を与えるんです。

何を話したらいいかわかりませんけれども、それぐらいにしておきます。（拍手）

司会 ありがとうございました。

たくさんの問題、特にアジアから来た留学生に対する日本社会の持っている文字にならないような差別の問題から、あるいは役所の対応、大変いい面と逆に日本の入管行政とか外国人行政の中でいつも問題になっております指紋押捺の問題とか、後からまた、これも担当の方がいらっしゃらどう感じいらっしゃるか、意見交換ができたらと思います。

それにも増して、オーさんは日本にいらしてまだ1年なんだそうですけれども、大変に日本語がお上手で、中国の日本語教育のことについてもまた後から御紹介いただければ大変ありがたいと思います。

続きまして中村さん、よろしくお願ひします。

「外人だから分からぬ」と言わないで

アメリカ、中村ベバリーさん

中村 私は中村ベバリーと申しますが、私は日本語はそんなに上手じゃないから、よろしくお願ひします。

私には17歳の男の子と11歳の女の子がうちにいます。横浜市立学校行っています。

私の場合は、アメリカに産まれて、大学まで住んでいて、大学の3年のときに日本に留学しにきました。そして1年でアメリカへ帰って卒業し、あと、1年ぐらい働いていました。そしてまた日本へ来て、留学生のときに知り会った主人と日本で結婚しました。その後はずっと日本に住んでいて、時々アメリカへは帰りますけれど多分死ぬまで日本にいます。

今までは人生の最初の半分はアメリカに住ん

でいて、あの半分ぐらいは日本に住んでいます。日本の19年の間では、最初の半分ぐらいは東京に住んでいましたが、あの半分は現在の横浜に住んでいます。

まず最初に、どうして日本に留学生したかといえば、いろいろあったんだけど、日本は何かおもしろそうな国だと、おもしろそうな文化があるとか、そういう考えがあったのです。私はアメリカのインディアナ州に産まれて、そこはアメリカの真ん中辺のシカゴの近くですが、私の生まれたところは大きい都市だとみんな言うけれど、10万人の人口で、日本に来るとやはり小さい（笑声）。そこではずっと日本人など、子供のころは見たことないのね。だからやはり興味があって、小さいときに百科事典でよく調べて、いろいろなことを読んで、おもしろいなと思った。10歳か11歳ぐらいのときに下駄を自分でつくってみたの。あのころは足がぬれるような靴はおもしろいな、つくってみたい、格好いい靴だと思ったの、子供らしく。

その後は日本の勉強のチャンスはほとんどなかったのです。だけど、大学のときに、私の大学は一私はラテン語を勉強していた関係から、日本のプログラムかイギリスのプログラムしか受けられないので、イギリスはアメリカといろいろな関係が深いのであまりおもしろくないので、日本の方がおもしろいと思って日本に來ました。最初、留学のために來たので、ずっとその後、日本に住むことになると思わなかった。

結婚しようと決まって、結局結婚してから日本にずっと住んでいますが、もちろん学生の生活と結婚している生活は随分違っています。結婚したてのころは1人で親戚いないし、私の場合には主人と大学の友だち少ししかいないから、ほかのだれも知らない。それですごく孤立状態でしたし、いろいろな知りたかったことが

いっぱいあったので、そのころに「日本人の外国人妻の会」をだれかがつくりまして、私はそこをずっと手伝っていました。やはりみんな文化ショック、カルチャーショックが最初の方は強いですから、一番難しいときに、みんな自分の国語で話ができると、いろいろな安心ができるんですね。

だけど、そのころを思い出すと、よく文句を言いたいとかいう気持ちがいっぱいあったんだけど、長い間たつと慣れてきて、もっと理解できるようになったから、文句はちょっと言いにくいけど、やはりみんなに理解してほしいという気持ちになってきますね。

最初のうちは、例えば区役所とか市役所とか一きょうはみんなそういう人がいますから……。私の思い出としては、アメリカには区役所とか町内会とか回覧板とか、そういうようなことは全然ないのね。どこに住んでいるとか、引っ越すときとか、住民票とか、そういう登録は全然しないから、日本に来るとやっぱりショックですね。何で登録しなきゃならないのか、と。どうして警察とか区役所がみんな知りたいのか、私は何も悪いことをしていないから関係ないとか、そういう気持ちがすごくいっぱいあったの。私も生きなければならぬから、外人登録とか、印鑑証明をつくるときとか、戸籍謄本をとるとか、区役所などに行くときに我慢して気持ちを抑えていく。だけど、いろいろなウーンというような気持ちが出てくるのね。

今は、まあ日本はそういうシステムだからしようがないとか、あることはまだ面倒くさいと思うけど……。最初に怖かったことは、交番の警察の人が年に1回か2回うちに来るでしょう。何かファイルで、この家に何人住んでいるかとか、何の仕事をしているかとか、いろいろ聞くのね。最初のうちは、警察が来ると、「ど



中村 ベバリー (Beverly U. Nakamura)  
1946年7月8日生  
アメリカ  
在日 1969年 (1966-1967年早稲田大学・留学)  
保険代理店  
横浜市海外交流協会機関紙「横浜エコー」スタッフライター  
横浜国際協会秘書役  
外国人のための情報サービス研究会メンバー  
日本人の外国人妻の会会長  
横浜市中央図書館基本構想委員会会員  
趣味 庭いじり・読書  
(横浜市南区在住)

うしたのかな」とか、主人が死んだとか、何か悪いことをしたとかね。何も説明しないでいろいろ聞くと、警察だから、ああ言わなきゃとか、言うのは悪いかなとか、いろいろな心配が出てくるのね。

後で、どうしてくるのかという一つの理由がわかってきたから、まあ私のイメージは変わりましたね。例えば地震とか火事があったら、火事で家が全部燃えたら、何人住んでいるはずだと、そういうのがファイルにあったら非常に早く調べられるとか、助かるかもしれないとか……。だから、まあいいんじゃないかなと思うんだけど、やはり国と国の習慣とかいろいろなことが違うとショックを受けるのね。

最初のときのすごく印象的だったこと、一番嫌いだったのは、日本はよく外人を見ると「あっ、外人だ」「外人だからわからない」、すぐそう言うのね。何も言わなくても、すぐ「外人だからわからないでしょうね」とか、決まって分からぬときめつけるみたいで……。

日本語はそのころはもちろん悪かったけど、

余り話せなかつたんだけど、何の国語でも、習うときには聞くことが一番早い。しゃべれないけど、聞くのは早くわかるのね。だから、もちろん私を見たら「あの人は全然わからない」と言っているの。しゃべらないけど、聞くことはできるのね。だから、「あっ、外人だからだめ」とか……。ウーンなのよね。全然しゃべられないとフラストレーション、ね。

そしてもう一つは、わからないから、我々日本人は違うとか言うのね。「どう違うの、人間でしょう」といつも思ったのね。

すごく残念なことは、日本に来る前には、日本はすごく和合というのが大事とか、協力するとかいわれていましたね。来たら、日本人と日本人はそうだけど、外人とはかの人だったら全然必要じゃないとか、日本人は違うとかいうのね。今はだんだん日本人はよく外国へ行ってるし、いろいろな経験があるから、20年前と今を比べると大分変わったと思いますけど、あのときは、本当にいろいろなことを思い出したら…。

日本人も外国人も、みんな人間は人間ですね。みんな愛するとか、嫌いとか、食べるとか、寝るとか、みんな大体正直なのがいいと思うと思うのね。泥棒は悪いとか、いろいろな基本的なことは同じ。もちろん習慣とか、どういう社会の中ではどうすればとか、それは違うんだけど、それがおもしろいですね。同じ人間で、そんなに違う習慣があるとはおもしろいね。

一番簡単な例は、アメリカだったら握手をする、日本人はおじぎをする。考えたら同じ意味でしょう。この人はいいから握手するとか、おじぎするとか……。嫌いな人に余りしないとか、「フン」って悪いおじぎとかね。だから、ずっと中は同じで……。だから私が一番希望があるのは、日本人は、日本人は違うと信じない

で変わってほしいです。よろしくお願ひします。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

たくさんの問題が出されまして、皆さんの方から御意見を賜ったり御質問を受けたりする前に、きょうまとめの役をやっておりますので少し整理をして、2～3分お時間をいただきたいと思います。

日本が近代社会と言われるようになってから、国際問題で意識をしたときが3回あると言われているんです。一つはもちろん明治維新のころ、明治の初めですね。第2回目が1945年の敗戦を境にした時期ですね。それから、3回目が、1960年代にものすごく私どもの社会が工業製品をつくって販売をして、1970年代になってからその批判がすごく出てきて、そして国際化とは何なのかということが問われた3つの時期があると一応言われているわけです。

それで、自治労の皆さんもこうした全国集会で「地球人よ集まれ」という企画を、実務的には神奈川県の自治労が担当されたようでございますけれども、自治体の方々までもこうした問題をとらえて、日本人が国際的な社会の友好的な仲間入りをするための具体的なノウハウをお互いに意見交換をしてとらえようという時期になってきているわけでございます。

きょうのお話の中で、地方自治体は、特に諸外国の場合は、今御専門の立場からの発言ということではなくて、体験的にありましたけれども、日本の自治体が登録業務に関しては世界で一番厳しいといいますか、いい言葉で言うとちゃんとしているんですね。例えばオーストラリアの場合でも、アメリカの中村さんのお話もありましたけれども、余り住民登録まできちっとやらない、そういう点がございますし、中国の場合もそうです。悪い言葉で言うと、幾ら統計

をとってもなかなか正確なものが出てこないということがございますね。逆に言うと、一人一人個人で生きている幅が広いといいい面がありますね。そんなこともありますて、これから日本が地球的規模の市民社会に入っていくときに、今いろいろな問題がありますね。細かいところから言えば、半年こちらにいて、女性だけがなぜお茶をくまなければいけないのか、そんな指摘もありました。教育問題もありました。

最初に一言だけお話いただいたアルテンバイさんは、要するに警察が悪いんだというお話がありましたけれども、もう一言アルテンバイ先生に日本の国際化社会の諸問題とか—日本にいらっしゃるから、私たちと同じようなお気持ちでいらっしゃるかもしれませんけれども、アルテンバイ先生にコメントをいただいて、それから皆さんの御質問、御意見を賜りたいと思います。先生いかがですか。今、お聞きいただいて、それにつけて加えることとか、御自分のお立場から……。

### 他国を知り自国を知ろう

#### 医師も威張らずに

アルテンバイ きょうのテーマと全然関係ないですけれども、こんなことを言ってもいいのかな。日本人はどうして僕の国のこと全然知らないんだろうなというものはありますよ。余りの無知さにあきれるぐらいです。

まず国旗からいいますと、日本は太陽ですね、日章旗。僕の国は月と星の要するに陽の暮れる方の国旗ですね。それだけからでも簡単に覚えられるし……(笑声)。それから、日本はアジアの東に頑張っているし、我々はアジアの西に頑張っているんですけれどもね。



アフメット・アルテンバイ (Ahmed Altinbay)  
1919年10月20日生まれ  
トルコ  
在日 1924年  
職業 医師  
日本との親近感が強いこと。いつも何か有効なことをしている。  
患者さんより——「赤ヒゲ」先生の外人版だという評判もある。  
先生は休みがないんだ。仕事が趣味だから。  
先生の一言——オレを知らないのは横浜のモブリだ。との事。  
市から表彰されだとさ「ゲタ」をもらつたが、何のことか、いまだに意味不明。  
(横浜市中区在住)

一応こんな顔をしていますから外人だということはみんなわかるので、時々聞かれるんですよ、「お国は」って。それで、直接言うのが悔しいから、「アジアの一番西の」とか何とかいろいろ言いましても、大抵わからないですね。日本人の1割がわかるかどうかと思われるぐらいです。

一度テレビジョンでこういうのがありましたよ。クイズ番組があって、いろいろな国旗を出して国を当てなさいという番組があって、1人の小学生が、僕の国の旗を出したら「ソ連です」と言ったときには本当にがっかりしましたよ(笑声)。少なくとも我々は祖先を共有するというぐらいの寛大な考えを持っているのに……(笑声)。それから、例えば日本ではパリとかロンドンとかニューヨークの貧民窟まで知っている人が多いのに、うちの国の首府が何であるかとか、全然無知な人が多いですね。そういう点ではがっかりすることがあるんですけどね。

それから、我が国名がしばらくの間、変な用語に使われていましたからね。例えば、早い話、

世界のミスコンテストがあるでしょう。それで「ミス・トルコ」と言うと、みんな変な方を考えちゃって、全くがっかりすることがよくありましたよね。そういう点が一つあります。

あとは、僕自身が割に日本語ができるということと、これでも割に交際が好きなもので敵をつくらないタイプなので、大体隣近所とも非常に仲がよくしています。何のことではない昔の隣組のようなものをつくってあります、時々お互いに訪問して飲んだり食べたりする、そのぐらいですから、あらを探せと言われれば非常に嬉しいですよ。これは本当の話が。

強いて言えば、医者ですから一の中にお医者さんはいないでしょうね。医者と言うものは、昔はよく威張っていたものですね、そういう点はちょっと気になることがあります。医者も患者もみんな人間だし、患者が何かで訴えてきた場合には親身になって心配してあげなくちゃいけないのがごく当たり前だと思うだけれども、何だか「診てやる」みたいな人がいれば、これは一番困りますね。それをみんなが直してくれれば……。これは僕の職業の面のことですけれどもね。

それから、これは非常につまらないことなんだけれども、どこか専門のお医者さんに患者さんを紹介することがあるでしょう。そうすると、外国では、たとえ紹介されたお医者さんが患者さんを診ていても忙しくても、手術でもしていない限り必ず優先権を与えるものだけれども、大体日本のお医者さんというのは、威張るのか何だか知らないけれども、わざと待たせるんですよ。これはまず例外がないな。そういう点は少し不思議に思うんですけどもね。何というのか、自分の職業をすごく偉いと思うのかしらね。その点は、きょうはどうせお医者さんがいないでしょうから、言ってもしようがない

でしょうね、とにかくもそっと思いやりというものが必要だと思います。

まあそんなところです。

司会 どうもありがとうございました。

今日の焦点は、日本がこれから国境の向こうの市民たち、そういう人たちと一緒に仲よく暮らしていくための社会をどうつくるかというところにあわせた議論をしていただきたいと思うのですけれども、本当にさまざまな御意見が出ておりますので、どなたにお聞きしたいということを最初からちょっと手を挙げて言っていただきまして、そしてまとめてお答えいただきたいと思います。

まず、トルコのアルテンバイ先生がお話しさったことは、日本人たちが、自分の国も含めて諸外国、特に英米とか、現在で言えば中国、そうした非常に大きな国以外のところは余り知識がないのではないか。これは国際的な情報ということについて偏りがあるのではないかということをおっしゃったように思うんですけども、そんなことも踏まえまして、滞日60何年ですから、お話しなさってないことでも随分知っています。御質問ございますか。

そうしましたら、オーストラリアのウォーミントンさん、この方は何かおとなしいですね。

私自身も学校で国際問題その他を教えておりますが、例えばブルネイという国、名前を御存じな方は相当詳しい方だと思いますが、その内容について日本との関係を余り知らない人が多いんです。例えば私どもが使っている天然ガスの4分の1ぐらいはブルネイの産出ですね。そんなことからブルネイという国を紹介する番組を今年つくったんです。あの番組というのは視聴率が30%ぐらいありますから、映像で子供さんとか主婦の方がこれを知ると、安定した国際感覚になると信じてつくっているんです。

それは、40年前、50年前に日本政府がイギリスとアメリカには畜生が住んでいるということを言いましたら、信用しちゃったわけですね。ところが、例えば「なるほどザ・ワールド」にせよ、その他のいわゆる子供向き番組の中でさえ、普通の人が普通の生活をしているという習慣のレベルで映像で知っておけば、日本政府が仮に鬼畜米英みたいに言っても今度は恐らく信用しないだろう。外国情報が多元化した方が、マルチチャネルになった方がいいんじゃないかということを考えてやっているんです。

ウォーミントンさんは特に半年いらして、外国語教育で日本の英語教育はすばらしいとおっしゃいます。私ども、この前打ち合わせをしましたときに、それでは先生のところのオーストラリアでは外国語教育はどうしているんですかとお聞きしました。最近、オーストラリアも日本語の教育が盛んですけれども、フランス語の例をお話しさいまして、それに比べたら随分いいと。では、オーストラリアのフランス語はどうなんですかとお聞きしましたら、向こうでは単語と文法をちょこちょこと教えてフランス語は全然話さない、それに比べたら日本はいいかもしませんねという話をしていたんです。そんなこともございまして相対的な問題がございますが、何でも結構ですから御質問をなさっていただきたいと思います。

くらし、税金、高齢化、  
国対国の関係に質議が

質問 トルコのアルテンバイ先生、それからウォーミントンさんのお2人にお聞きしたいんですが、それでは皆さん方の国では日本という国に対してどういう認識を持っておられる

か。もしくは日本人というものに対するイメージといいますか、長いこと日本でお暮らしになっていると思いますけれども、わかる範囲で結構ですので……。

司会 そのほかいかがでしょうか。ドイツの志賀さん、それから中国のオーオーさん、アメリカの中村さんでございますけれども。

質問 どなたにお伺いするということはないんですけども、長い間、日本に住んでおられる方にお伺いしたいと思います。

レーガン大統領は「小さな政府」という言われ方をしています。日本でもそういう意見もあると思います。そういう中で、日本に長い間お住みになられて、例えば所得税、市民税等払われているんじゃないかと思うんですけれども、それを高いと感じられているのかどうか。また、市役所の職員が人口の割に多いと考えられているかどうか。市役所は親切にしてもらったということを聞いているんですけれども、例えば学校給食の問題とか清掃の問題一先ほどお子達のことで、清掃は市役所でやっていると言わっていましたけれども、そういうのを役所がするのがいいのか、あるいは民間がやるのがいいか、その辺をどう考えておられるか。本国といいますか、そこの国の人々の意見も交えてちょっとお聞きしたいんです。

司会 ありがとうございました。

そのほか。

質問 シルバーコロンビア計画なんですかけれども、日本人が老後に外国へ行って本当に快適に向こうの生活ができるかどうか、外国人から見て、日本人が外国に行った生活面、これについてお聞きしたいと思います。

司会 今の質問はわかりますかね。日本の人たちが一応定年まで働きまして、その後お金を持って外国で暮らすことが今いろいろあります

すし、そしてまた、そのときに蓄えたいいろいろな技術とかノウハウ、知識、そういうものを外国で役に立てたいとか、そういう計画が日本であるんですが、そういう場合に今の日本人で役に立つんでしょうかと、こういう御質問なんです。

**質問** 今、前におられる方は皆40数年前は同盟国と敵国と2つに分かれた関係がありますが、今、日本では中曾根さんがいろいろ日本の改革ということで進めておりまして、特にこの夏、秋と沖縄で国体があったわけです。また、国体では、特に中曾根さん、国際化ということで日の丸の強制とか、君が代の強制とか、こういう国歌、国旗ということを非常に強く言ってくるわけです。

しかし一方で、沖縄とか、あるいは在日韓国・朝鮮人等から見れば、日本の国旗には一体どんな意味があるのやというのがある。前に座っておられる方も、それぞれの国で国旗を押しつけるとか、これが国歌だというような教育がされているのかどうか。

また、ドイツではハーケンクロイツなんかは法的にも禁止されていると聞いているわけですが、そういう戦争の責任とか、そういうことなんかの国民の中での理解というのはどうなのかということをお互い交流するためにも、それをちょっと抜いてしまったらいかんのじゃないかなと思いますので、ちょっと教えていただきたい。

**司会** もう一人だけ。

**質問** 沖縄に住んでいて外国人の人と接する機会は非常に多いわけですが、その99%はアメリカの軍人なんです。兵隊さんです。私はその一番ど真ん中のコザというところに住んでおります。

誤解のないように聞いていただきたいんです

が、私たちがアメリカ人を見る目は、早くこの沖縄からどこかへ行ってほしいということなんです。アメリカ人に対して本当に好感が持てるという状況にはない。日常的に軍事演習が行われている。そして被害が相次いでおります。そして、私たちが水不足で苦しんでいるときも、基地の中は豊かな水があるわけです。そういう意味で、軍事基地、戦争の準備イコールアメリカ人という関係でしかないというのは非常に残念に思います。

そういう意味で、インドの方、中国の方、朝鮮の方というのはありますけれども、アメリカ人に対する感じ方とは全然違うものがある。いろいろ政治的な背景もあるわけですから、そういうことも含めて御意見なりコメントなりお聞きしたいと思います。

**司会** まだたくさんあると思いますけれども、これで5ついただきましたから、まずお答えをいただきます。最初もお断りいたしましたように、私どもの企画は、背中に国を背負って出ているわけではございませんので、アメリカの軍人はどうのということを中村さんに責任を持って答えていただくようなことはいたしませんし、その場ではございませんから、御了解いただきたいと思います。

まず最初に、アルテンバイ先生に、日本のことについてお国ではどれほど知識がありますか、どういう教育をされていますかという御質問がございましたので、簡単によろしく。

**アルテンバイ** これは僕の最も得意とする歴史の問題になってくるのでね。

**司会** そうですか。それは簡単に、簡単に……(笑声)。最初はしゃべらずにいて、今度はしゃべるというんですよ。

**アルテンバイ** トルコが日本を知るようになったのは日露戦争の後ですね。その日露戦争

で日本が勝ったということが非常に歓迎されたわけです。そのときから日本に対するいい印象を持っているわけです。日本人は立派で、よく働いて、しかもあんなに小さな国のかくせに、あれだけ横暴なあの国を負かせたと。

そのほかにも、まだ明治天皇がいらっしゃるころ、トルコもまだ王国だったわけですから、王様が特別に船を何隻も出して表敬訪問をやったわけです。その船団が目的を達して帰るときに台風に遭って、多くの船が沈んで死んだ人も多かったです。それがちょうど和歌山県のある海岸で起こって、そのときに村民がみんな一生懸命になって大勢助けてくれたといいうい歴史もあるんですよ。そういういい印象もある。

現在ではトルコの方が日本人がトルコを知る以上によく知っていますよ。非常にいい印象を持っているので、例えば日本人の観光客がいれば、もう徹底的に歓迎して、非常にいいことをあげようと思って努力しているわけです。問題は、日本人がそれをよく理解してくださって協力してくださるようにお願いしたいわけですけれども、とにかくトルコをもっとたくさん知るようにな……。

日本人の一つの欠点かな、先進国に対しては必要以上の敬意を払うんだけれども、同じぐらいか少し下がっていると途端に態度が変わることは、皆さん御自分でも御存じだろうと思いますけどもね。

司会 大変厳しい御意見を賜りましたたが、ついでにもう一つ、日本の税金は高いかどうかというのをちょっと答えていただきたいんです。

アルテンバイ 比較したことはないですけれども、確かにすごくこたえますよ（笑声）。

司会 本当はもっと詳しい話を聞いていただいたらいいんですが、たくさんほかの質問もございましたので……。

アルテンバイ 一つだけすごく不思議に思いますのは、家や土地をうっかり持っていると何でどんどん税金を上げるの。あれは別に売るわけでも何でもないのにね。

司会 そうですね。今はその問題が、地上げ屋とかいってありますのでね。

それでは、先ほどの御意見の中で、日本についての教育はどういうことがされているのか、これも大変大きな問題ですから、それぞれ簡単にどの程度か。日本人が皆様のお国を知っているのと比べて、皆様のお国の人々が日本をどれだけ知っているかということだけ、お答えいただきたいと思います。ウォーミントンさん、オーストラリアの人はたくさん日本のことを見ていますか。

ウォーミントン 余り知らないと思います。日本は貿易で大事な国として知っている。でも、最近、よくテレビで日本についての番組が増えてきました。

司会 志賀さんの国、ドイツでは日本のことを見分たくさん知っていますか。

志賀 例えばうちの上の子供はヒロシという名前です。そして、「何という名前」かと名前を聞かれて、「ヒロシ」と言ったら、みんなすぐに広島と関係があると思って……。やはり日本を十分知っていないんだから。私は自分でも広島は全然考えていなかったです。いろいろなことを知っているという気はそんなにしないんです。

司会 では、こちらに来て税金のことなどはどうですか。

志賀 税金……。私は、計算のことは余り興味がないです（笑声）。

違うことは、例えばさっきの話のドイツのハーケンクロイツ、変えてもいいかどうか、今の時代は自由に意見を出していいという時代に

なっていますから、本当はハーケンクロイツ変えてもいいんです。けれども、大抵は考えられないんです。そして、だれかが変えたら、すごく右の方だと思う。そして、政府の上の方から考えられないです。国歌を歌わなければならぬと押しつけるのは、それも考えられないです。

そして、私の方から見るとやはり危ないと思います。こんなこと、押しつけたら。また、学校でそういうふうに教えなければならぬのは。子供たちに伝えること、もっといいことはないんでしょうか。例えば世界じゅう、みんな同じ人間だとか、そういういいことはいろいろあります。

司会 そうですね。

オーさん、そのことにも関連しまして、中国における日本の教育というのは大変難しい問題がありますし、教科書の問題でも中国側からの発言もございます。それはここにいらっしゃる方は皆さん本当によく御存じですから、特に今の御質問の中で日の丸とか国旗とか、あるいはアメリカの沖縄の基地の話が出ましたけれども、そうした日本の大変な軍備、そういうものについて中国人はどう考えるのかということを少し話してくれますか。

### 中国で戦争反対の教育が日常化

#### 狭いナショナリズムに疑問

オー 中国では、かなり日本について教育で出ているんですが、恐らく歴史のつながりも長いですし、戦争の時代もありましたし、今、友好的に盛んにやっている時代もありますから……。私の経験から言いますと、小学生のとき、もう随分日本のことを探っているんですね。まず知っているのは戦争のこと。日本人

はどのように中国に入って、中国人を殺したか。映画を見たり、先生も話してくださいったり、年寄りの人も話してくださいったり、いろいろ知っています。

けれども、中国の学校の教育の中で侵略というふうなことを言いますと、ただ日本だけでなく、また先生も、イギリス人はアヘンを運んできましたし、イギリス人、フランス人は中国の圓明園のような立派な庭園も焼いてしまいましたし、日本ばかりではなくほかの国も侵略の歴史なら全部言うんですけども、それと同時に、私、非常に深い印象ですが、小学生のときからずっとこういう話ばかり。

つまり、戦争をやったのは日本の一派の軍国主義者で、日本の国民は従っていくわけで責任はそれほどない。そして、日本の国民も戦争の中で、例えばだんなさんが妻や家族を持っていても戦争に行って死んでしまいました。そして、16歳の男性の子供も戦争に行って死んでしましたし、また広島、長崎に原爆が投下されて非常にみじめな状態もありました。だから、戦争の被害の面から言えば、私たちは日本人と手をとって戦争に反対しなければという教育ばかりです。

そしてもう一面、中国人の、特に今の若者の日本はどういうイメージですか、と。もちろん昔の歴史は知っていますけれども、日本はたしか100年来とても速いスピードで発展している国で、進んでいる面がありますから、勉強しなければなりません。だから、中国は近代化の政策をとって以来、大学の先生一私も日本史を教える先生でしたので、明治以来、日本はどういう道をたどったか、どういうわけで進んでいるか、いろいろ教えてますし、こういう教育を受けている人はかなり冷静な目で日本を見ています。けれども、それほど歴史の教育を受けていない

若者なら、かなり日本を知っていても片一方に偏っちゃって、日本は豊か、日本は今経済大国、あこがれしているだけ、こういう人もいます。これが大体中国人の日本についてのイメージです。

でも、最近はいろいろ教科書の問題も出ていて、靖国神社参拝とか、光華寮の問題、いろいろ出ましたが、これはいけないと中国の若者の多くは思っています。特に大学生。でも、これは日中友好、特に民間レベルの交流に影響しないと思います。日中國交正常化の前、両国の関係も非常に厳しかったんですけども、民間人は積極的になってきましたし、今はもっと盛んにやっています。そして日中國交回復、それから戦争の賠償金など、中国の方は全部放棄するということで、中国人は、周恩来総理はよかったです、田中首相はよかったです、みんな万歳、万歳と、大多数の人は喜んだんです。

だから、昔は敵国で、特定の時代だったんですが、今は違う時代ですから敵国とは言えません。ただ、今、中曾根さんがよく国際化、国際化と言っても、かなりナショナリズムが強いという感じですね。今、国際化という形でやっていますけれども、その内実はやはり前と似たような狭いナショナリズムがあるんじゃないかなという気がします。こう思っているのは、やはり中国の知識階層、知識人がそう思っています。若者は全然知らない人も多いですね。

司会 ありがとうございました。

あと、老後の世界、特に日本の中でこれから高齢化社会になっていくときの問題と、沖縄の基地のことからお話をされたこと、そして日本の役所の効率、人数の問題とか、こうした問題もありますけれども、沖縄の問題については全体で考えなければならない問題ですから一番後にさせていただきます。中村さんに、アメリカも同様に高齢化社会になっていって、アメリカ

の方がこちらに旅行にいらっしゃる方も随分年輩の方もいらっしゃるし、我々も行きますと、公園で犬を連れてじっといらっしゃる方とか、たくさん大変な問題があると思うんです。日本の高齢化社会、特に仕事を終わりまして、そしてなおかつまだお元気ですから、自分がもう一度社会に貢献したいとか、こうした問題について、アメリカの例を見て体験的に少しへコメントをいただければ……。

それから、日本は今、例えばオーストラリアの方へ技術の協力に行く人もおりますし、あるいは中国もオーストラリアに対しても日本語を教えに行く人とか一緒に勉強する人とかいらっしゃいますけれども、アメリカの場合、年輩、特に仕事を終わった人はどういうことをしているのか、それから見て日本の高齢化社会にどういうことが言えるか、ちょっとだけお話しいただけますか。

### 親族同居には習慣の違いが

### 高齢者の住みよい環境設備を

中村 非常に難しいことだと思いますけれども、私はいろいろな考えがあるけど、私は軍事と全然関係ないんだから……。

司会 軍事の話は今質問しているのではなくて、今、高齢化社会というでお話がありましたがけれども、それで一番問題になっているのは、ドイツとか日本、アメリカ、そういういわゆる先進国といわれている中で平均寿命が大変高くなっているところ、その人たちが50とか55、60歳で仕事が終わってからどうするかということが大きな問題になっていますね。

中村 老人の問題はむずかしい問題です。定年についてもアメリカはいつも日本と逆にし

ているみたいね。日本人は55歳でリタイアだったのが、だんだん長くなっているけど、アメリカ人はずっと昔から65歳でリタイアしていますが、だんだん早くリタイアしたいとみんな頑張っている。

あと、老人が多くなると、早くリタイアしないと下の人は上がってこれないけど、老人が余り多くて若い人は少ないと、ちょっと社会の中に無理なのではないか。社会が全然違うから比べるのはちょっと難しいと思うのね。

日本の家族は70%かしら、子供が大人になって結婚しても、おばあちゃん、その人と孫と一緒に住むという習慣がずっとあるけど、アメリカはちょっと違って、日本人の目から見ると、別々に住むと「ああ、かわいそう」とか「寂しいでしょうね」とか、そういう考え方で……。だけど、アメリカ人の場合はそうじゃないのね。私の母だったら、できれば一緒に住みたくなり。嫌いだからじゃなくて、好きだからやりたい。余り一緒にすると、仲よくは難しくなるから。だから、老人が多くなると、アメリカの場合は老人ホームとか、そういう結果がいいみたいですねけれども、日本の場合は精神とかいろいろなことが違うんだから……。

司会 簡単には比べられないですね。

中村 最近いいことは、新しいタイプ家、2つの家族が一緒に住む。キッチンとか違って同じ家に住むとか、そういうのが日本の場合にはちょうどいいんじゃないかと思う。だから、自分の国の方が、どういう社会とか、どういう問題かを考えてつくってというのが一番いいと思うのね。

司会 志賀さんのところのドイツも同じ問題を抱えていますね。僕は昨年、ドイツのビュルツブルグというところへ行って、老人ホームに行きましたけれども、老人の方が同じ建物の

#### コーディネーター

渡辺武達（わたなべ だけさと）

1944年愛知県生まれ。平和中学、津島高校から同志社大学に入学（1963年、英文学専攻）。1969年同志社大学大学院修士課程新聞学専攻修了。英語学と市民外交論を専攻のかたわら、国際会議のコーディネーターや市民レベルの国際交流に努め、訪問国は約100カ国。現在、京都産業大学教授の他に、日本セイシエル協会理事長、日本卓球協会国際交流委員、全日本柔道協会常務理事。また、大阪府国際交流検討委員、京都市国際交流委員会専門委員、などを歴任。

主著に「ジャパニッシュのすすめ—日本人の国際英語」（朝日新聞社刊）、「セイシエル・ガイド」（恒文社刊）。訳書にW・ライビ「オルガスムの機能」（太平出版社刊）、共編著に「琵琶湖と富栄養化防止条例」（市民文化社刊）など。



市民運動としては、朝鮮を考える会代表世話人、滋賀の自然と琵琶湖を守る市民の会代表委員、比叡山系を環境破壊から守る会事務局長、など。

中に、非常にうまく市役所にお世話を聞いていらしたんですが、逆に僕も非常に問題を感じました。老人の方が老人だけで集まっているらしいやるという問題も感じたんです、ドイツに行ったときに。

それは、それぞれの場所でいろいろなところで違いますけれども、日本の高齢化社会に対してどんなお感じを持っていらっしゃるかということと、もう一つ、先ほどの御質問でだれかに答えていただきたいと思ったんですが、日本の役所の人数は多いか少ないか。たまたま鎌倉市役所で何かありましたから、それを一言。

志賀 では、どっちを先に……。

司会 高齢化社会のことをもし一言あれば……。

志賀 老人のことですか。

私も新聞で読みました。例えば日本人は将来でグループとしても外国で暮らしたらどうかと。私はちょっと変だなと思います。

特に違うのは、日本には普通は休暇がないんです、会社で休みが。だから、勤めている間に本当に1ヵ月違う国へ行くことができないです。そして、急に定年になったら外国の方で暮らそ

うとしても全然無理だと思います（笑声）。特に年をとったら、なりにくいんです。年をとったら、多分65歳はまだすごく元気な人が多いと思います。ただ、10年たつたら75歳になります。そうすると全然違う。大抵年をとると、自分は昔のことを一番思い出すんです。新しいことには大抵そんなに興味がないです。そして、世界じゅうは今、年寄りが増えていくでしょう。どんな国も年寄りが特に欲しい。それは私は、やはりなるべく年寄りは自分で自分の国をよくしたらいい。

司会 日本が自分の国をね。（笑声）

志賀 そう。だから、日本には今、本当にそういう老人のための仕事はいっぱいあると思います。

小さなことで、例えば日本にはエスカレーターは全然足りないと思います。特に駅は、外国からだれかが来ると、日本には階段が多い。もう上がって下がって、何回も。それは老人のために考えられていないんです。去年、母は74歳で日本に来たんです。階段が大変で大変で、いつもバスで行きたいんですが、バスで行くときもあるんですが行けないときも多いんです。これは一つのことです。

そして、一般的に、やはり老人のためにもっと、何とか豊かな生活を指導しないとダメです。ドイツでしたら、例えば教会がよく何かするんです。そういうサークルをつくって、何かすると思います。ただ、老人ホームもあるんですけども、老人ホームに入りたくない老人が多いんです。そして、十分元気でしたら入らなくていいんです。ぼけなかつたら。だから、どうしたらぼけないか、それを考えたらいいと思います。

司会 それからもう一つ、役所の職員の数とか、ですね。

志賀 役所のこと、私は特に日本人としてパスポートが必要なときは、どうして5年たつたら全部新しくしなければならないんですか。それはすごくむだな仕事だと思います。ドイツでしたらパスポートは何回も延ばすことができます。そして、新しくつくってもらったら、前のパスポートの紙がみんなあるから、それをまた……。一度ここに、あの日に産まれた、それは決まっています。変わらないです（笑声）。どうして日本ではこれを何遍ももう一度やらなければならないんですか。それが一つです。

そして、もちろんみんな何か仕事ができる、それはいいことです。ただ、例えば、この夏、イギリスの方へ行ったら、何も書いていない電柱が多い。そしてアナウンスも全然ない。高校生の子供にそういう話をしたら、イギリスにも日本と同じようにアナウンスがたくさんあったら、たくさん的人が仕事ができる。そして子供は、そうしたらイギリスの方にも赤字になる。だから、どんなんことでも両方あります。

### 国家間より市民同志の交流が

### 市民の平和秩序にかかる

司会 ありがとうございました。

今のお話、これは個人の考え方、体験からお話をいただいているので、そう受け取っていただきたいと思うのです。役所の問題、税金の問題、国旗の問題。それから、アメリカの軍事基地、軍人というものを沖縄で見ての御質問、御意見がございましたが、それは私ども全体で考える問題でございますから、ここの人人が答えるというような軽い問題ではないと思うんです。

はっきりしていることは、結局きょうのタイトルの「地球人よ集まれ」ということでござい

ましたけれども、国家と国家で物事を全部解決していくという考え方をやめようじゃないかということが言えると思います。つまり、今、これまでの戦争とか対立というのは、国家と国家、民族と民族とか、宗教と宗教とか、人間が集団対集団で対立したというところで個人が犠牲になったということは全部言えるわけですから、そこで出てくる「国とは何か」という問題を考えても、国というものが、中曾根さんの考え方でいうと、ちょっとだけオーさんがお話なさいましたけれども、ナショナリズムの変な強いのがあるんじゃないかな。

これは、最近のいろいろな論調を見てみると、国際主義とか国際化ではなくて、中曾根さんの考え方というのは一きょうは中曾根批判をやるわけではないんだけれども、国粹化とかですね。だから、英語で言うと、「ナショナリズム」の上に「ネオ」をつけて「ネオ・ナショナリズム」だと。特に口ぐせのようにおっしゃっているのは、世界の経済の10分の1を担っているんだから、それに応じた発言をしろ、と。明らかに国粹化ということが言えるように思うんですが、そんなところもそれとなくオーさんが答えておられましたので、大変ありがたいなと思って聞いておりました。

アメリカの軍隊が沖縄にいるから、そのことによって市民はアメリカというものを画一的に敵として、あるいはいい感じを持たないということは当然のことですございますので、2番目に言えるということは、今の社会というのを力による秩序から理解と相互依存の秩序に変える。言葉で言うと「市民の平和秩序に変える」と。抽象的になってしまいますけれども、そんなことです。

私もそうなんですけれども、ここにいらっしゃる方はそれぞれ市民運動、人権の問題、環

境保全の問題その他、皆さんそれぞれやっていらっしゃいますので、それぞれの立場で、自治労の方は自治労の立場でやらなければ決して変わっていかない、こんなふうに今考えて聞かせていただいておりました。

本当は皆さんの方からもっともっと質問をいただいてお答えするというのが一番いいんですけれども、質問の仕方、され方にも日本人の特徴が出ておりまして、最初に「質問ございますか」と言いましたら、だれも質問しないんですね。ところが、だれかが1人しまして、その質問が自分でもできる程度の質問だと安心しまして（笑声）、それでどんどん質問が出てきましたね。これは日本人の特徴ですね。

それはいいところだし、今後、国際社会の中でやっていくというときにそれが通用するかどうかは知りませんが、自治労の方もかかわる地方自治体というものは市民が一番身近に接するところです。特に外国人も一番身近に接するわけですから、これだけ長い体験を日本でいらっしゃる方が、きょう日本語で私たちにいろいろお話しeidaitaことというのは相当役に立つと思うんです。

きょう、ここで結論を得て明日からこうしようという話はもちろんできるわけはありませんから、そんなことを期待してもらってもいいけないんですけども、ヒントの幾つかはあったと思うんですよ。本当はもう少し時間があれば、日本社会のお酒の効用なんかの話をしてもいいですし、今、ウォーミントンさんが「お酒を飲まない者は出世できない」とかおっしゃいましたて、特に酒を飲んで労働組合の委員長になると、お酒をやめて総理大臣になったそうですけれども、そんな話もありましたけれども、それは一つの文化の体系をあらわしておりますので、そんなことも言わなければいけません。

私は、自分もそういう本を書いておりますけれども、国際人ということを皆さん指摘なさるときに、だれが国際人なのか。外国へたくさん行った人か……。そしたら交通公社などの添乗員が一番国際人になりますが、そんなことはない。つまり、先ほど中村さんも御指摘なさっておりましたけれども、国境の向こうにも私たちと同じように喜怒哀楽を持った人が生きているんだと。違うのは、あるところでは食べるときに右手だけを使って食べるけれども、あるところでははしを使って食べ、あるところはフォーク、ナイフを使って食べるというだけの習慣の違い。やはり友達や妻や子供がけがをしたり死んだら悲しいということはみんな一緒なわけですね。だから、国境の向こうにも自分たちと同じ人間が住んでいるんだということを知っている人、共感できる人、これが国際人だと僕らは言っているんです。

それからもう一つ、知識として、今、日本社会—これはアメリカでもどこでも同じなんですが、それぞれの国境の中だけでは物質的にもはや社会が成立しない、という地球的規模での相互依存社会になっている。国境の問題を、情報とか技術とかその他の資本は樂々と越えているけれども、今の問題は、日本人なら日本社会の日本人の普通の意識が越えていないということに問題があるんですね。だから、国境の向こうのことについて、権力を持っている人とかお金を持っている人は樂々と越えた、多国籍企業

などをやっているにもかかわらず、普通の市民がそれを越えてないものですから、非常に多くの問題を抱えているということが言えると常々考えているんです。

トルコのアルテンバイ先生など時間がたつほどだんだんしゃべりたいというタイプの方ですから、これから本当に夜がふけてくるともっとお話しいただきたいんですけども、もう時間がありませんから、またの機会に自治労がこういう仲介をしていただければ大変ありがたい、こう思っております。

このシンポジウムをもとにしまして、このような集会が全国で行われたら大変いいですし、また、きょうもいろいろなところでいろいろな発言がされましたけれども、外国語教育の問題も含めまして日本が考えなければならないことはたくさんありますし、沖縄の方が御発言されたこと、それから国旗、国歌の問題も大変な問題です。これはアメリカ人の問題ではなくて日本人の問題でもなくて、本当にひとりの人間として市民の平和とは一体何なのかということを、大変すばらしい御提起で考えさせていただくという機会をいただきましたので、宿題として残させていただきたいと思います。

きょうはどうもありがとうございました（拍手）。

〔この稿は録音テープをもとに編集しなおしましたので、文責は編集者にあります。〕

1987年12月25日

## 自治研かながわ月報 第12号（1987年12月号、通算76号）

発行所 社団法人神奈川県地方自治研究センター  
発行人 飛鳥田一雄 編集人 上林得郎 定価1部 500円  
〒231 横浜市中区本町1-7 東ビル 5F ☎ 045(201)1213  
振替口座 労働金庫本店 1365-100982 横浜銀行市庁舎支店 317-709629

### 会員になるには

1. 誰でも会員になれます。
2. 申込書は自治研センター事務局にあります。会費は個人会員月1,000円、賛助会員月500円のどちらかを選び、半年または1年分をそえてお申しこみください。
3. 詳細は自治研センター事務局 ☎ 045 (201)1213へご連絡ください。

### 会員の特典

1. 自治研センターの「自治研かなかがわ月報」が隔月送られます。
2. 「月刊自治研」（自治労本部自治研推進委員会発行・A5判・120~150ページ定価450円）が毎月無料で購読できます。
3. 自治研センターの資料集が活用でき、調査研究会などに参加できます。